BOSTON CONSULTING GROUP

国語科の資質・能力の育成や意識の醸成に寄与する学校での学習活動に関するデータ分析・検討業務委託

プロジェクト報告書　本編　公開版

2026年3月

OPEN YOKOHAMA

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア　研究仮説についての検討
- イ　データ分析方針の検討
- ウ　データのクレンジング
- エ　データの分析
- オ　分析結果の整理、取りまとめ
- カ　成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア 研究仮説についての検討
- イ データ分析方針の検討
- ウ データのクレンジング
- エ データの分析
- オ 分析結果の整理、取りまとめ
- カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

事業計画 (事業開始時当初の計画)

本事業の仕様書をベースに以下の形で事業を進める。
かつ、より効果的・効率的に事業を進めるため、仕様書にはない創意工夫も一部追加 (i ~ iii)

(2) 研究仮説、データ分析方針についての検討及びデータ分析、結果の取りまとめ	ア. 研究仮説についての検討	仮説の精査・深掘り (委託者想定 + 弊社追加)	有識者へのヒアリング
	イ. データ分析方針の検討	方針の検討・決定	追加データの検討
	ウ. データのクレンジング	i データサイエンティストによるプログラムベースでのクレンジング・分析	
	エ. データの分析		
	オ. 分析結果の整理、取りまとめ	結果の整理、取りまとめ	有識者へのヒアリング
	カ. 成果報告	ii 成果報告資料のビジュアライズ・発信戦略の検討	
(3) 先行事例の調査研究	デスクトップリサーチ		
(4) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案	研究方針の検討・提案	ヒアリングによる実現性確認	iii データサイエンスラボ全体の戦略の提案・議論実施
(5) 成果のとりまとめ、報告書の作成、次年度受託業者への引継 (データを含む)	ア. 本プロジェクトの総括	イ. 次年度受託者への引継	

仮説は、"分かったらいいな" ではなく、アクションに繋がるレベルまで精査・深掘りすることが重要。既に提案書の段階から先行検討済のため、高い発射台を活かして、事業開始直後から、貴市ご担当や有識者との議論を開始することが可能

限られた時間で効果的・効率的な研究を行うためには、本事業においては、プログラムベースでのクレンジング・分析が必要になると想定

- 履歴系ということもあり、データ量がおそらく多くなる
- 相関だけではなく、因果やルール発見的なことも踏み込む必要がある
- 記述式回答からの示唆も活かしたい

従い、類似事業にて大量のデータ分析を担った経験が豊富なデータサイエンストの投入を予定している

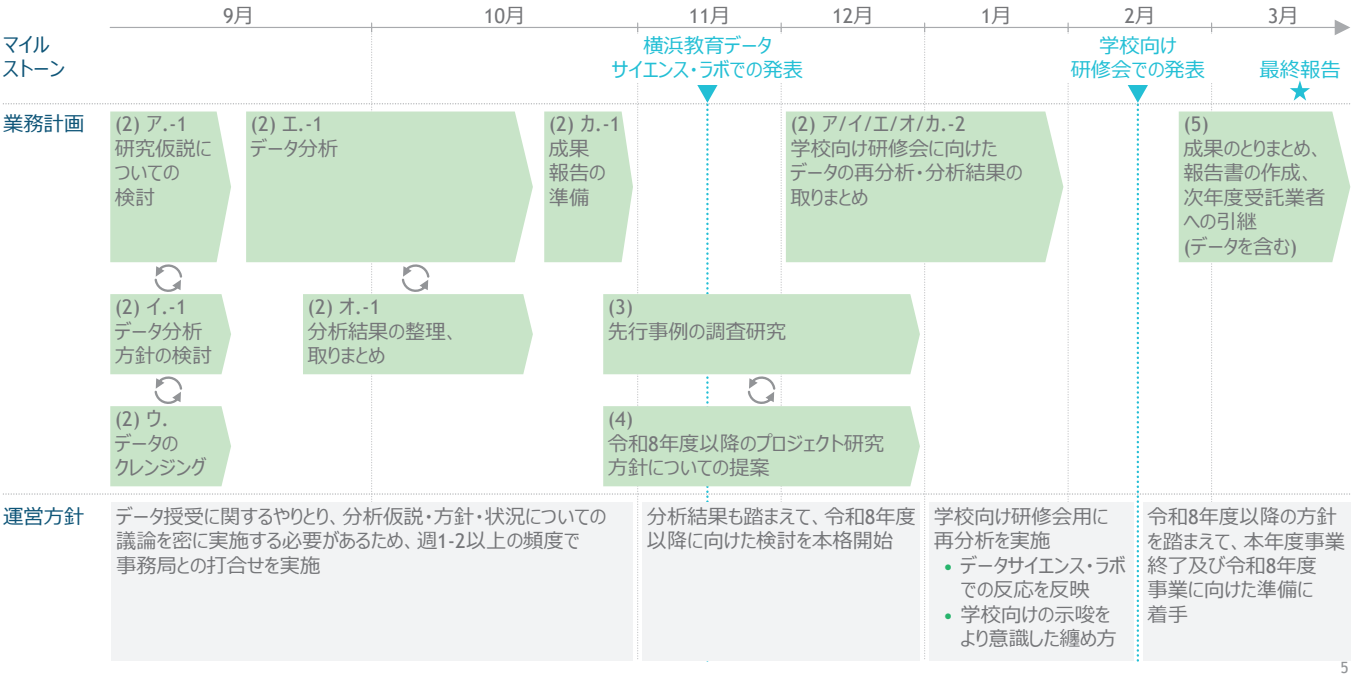
教育データ利活用の取組を、より拡大していくためには、本研究の成果を魅力的かつ分かりやすく発信し、現場のモメンタムを形成することが重要である

従い、弊社が社内に保有するデザインスタジオをレバレッジし、資料ビジュアライズや発信戦略の検討までをご支援する

来年度以降に向け、データ戦略のエキスパートを投入し、データサイエンスラボ全体の戦略議論も実施する

- 市として多くのプレイヤーを巻き込み、データの収集⇔利活用のサイクルを自律的に回していくためにどういうエコシステムを作る必要があるか

進捗管理の計画・体制・実施方法 (事業開始時当初想定)



Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア 研究仮説についての検討
- イ データ分析方針の検討
- ウ データのクレンジング
- エ データの分析
- オ 分析結果の整理、取りまとめ
- カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア 研究仮説についての検討
- イ データ分析方針の検討
- ウ データのクレンジング
- エ データの分析
- オ 分析結果の整理、取りまとめ
- カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

令和7年度は読書と国語科の資質・能力の関係を分析。まずは仕様書に記載の3仮説を優先的に分析した上で、追加仮説の分析も検討

本事業の目的

以下、仕様書より抜粋

本プロジェクトの最終目標は、国語科で育成を目指す資質・能力の育成や、望ましい学習に関する意識の醸成に寄与する学校の中での学習活動についてデータ分析を行い、学校運営改善や授業改善に資する結果を提供することである

令和7年度は、児童生徒の読書について着目し、現時点で収集、分析可能なデータを活用し、資質・能力に与える影響と学校現場での取組について一定の成果を得る。国語の力を、より着実に、効果的に育成するために、導入する電子書籍を含めた「読書」が確実に役割を果たしていることを、分析から明らかにしたい

令和7年度に実施する分析

仕様書に記載の3つの想定仮説に加えて、読書と国語科の素質・能力の関係を示す追加仮説も検討

想定仮説

1. 目的を意識して図書を活用している児童生徒ほど、横浜市学力・学習状況調査における各教科の正答率が高く、学力の伸びが見られ、自分で学び方を考え、工夫している
2. 児童生徒が利用している図書の分類によって、特定の学力(教科ごとの設問項目や領域等別分類) との相関が見られる
3. 「読書の量」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は、低学年ほど強く見られ、「読書の質」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は高学年ほど見られる

＋

追加仮説

読書と国語科の資質・能力の関係という枠組みの中で幅だしを行い、具体アクションを見据えた上で、分析すべき追加仮説を検討

仕様書記載の3仮説は、データの懸念事項を踏まえて分析対応方針を設計

仮説	必要なデータ	分析にあたっての懸念事項	対応方針
1 目的を意識して図書を活用している児童生徒ほど、横浜市学力・学習状況調査における各教科の正答率が高く、学力の伸びが見られ、自分で学び方を考え、工夫している	• 生徒が「目的を意識して図書を活用しているか」を問うたアンケート • 各教科の学力データ	なし	• 読書に関するアンケート: Q2「あなたが本を読むのはどうしてですか」の回答項目 "調べたいことがあるから" の有無が「目的を意識しているか」に相当すると判断し分析を実施
2 児童生徒が利用している図書の分類によって、特定の学力 (教科ごとの設問項目や領域等別分類) との相関が見られる	• 図書のジャンル • 各教科の学力データ	• 図書ジャンルデータに懸念事項あり - 図書館: 学校単位のデータのため生徒単位の分析ができない - 電子書籍: 夏季休暇中のためデータ量が少ない可能性かつジャンルは要確認 - 読書に関するアンケート: まんが、図鑑等、特定の学力領域と紐づく分類になっていない	• 電子書籍データに付与されている書籍ジャンルを用いて分析を実施
3 「読書の量」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は、低学年ほど強く見られ、「読書の質」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は高学年ほど見られる	• 読書の量 • 読書の質 • 各教科の学力データ	• 仕様書には「読書の質」の例としてジャンル、時間帯が記載されているが、ジャンルは②と重複し、時間帯は質と言えるのかが懸念 • 本来「読書の質」に該当する「読み方」に関するデータ (飛ばし読み、読了、ハイライト 等) は現状は取得できない見込み	• 今年度は、電子書籍データの読了を用いて分析を実施 • 来年度以降は、ポプラ社様と協議し、電子書籍サービスから「読み方」に関するデータを取得できないか検討 • ポプラ社様の電子書籍データか取得できない場合はアンケートで収集し得る

仕様書記載の3仮説に加えて、読書のやり方と学力の関係、および読書と環境の関係について追加仮説を検討

追加仮説の検討範囲の考え方

本年度は、Ⓐ Ⓑ は固定とし、Ⓒ Ⓓ は読書に焦点を絞った上で、仮説を検討していく

Ⓐ どのような人を育てるべきか

Ⓑ どのような能力が必要か

令和7年度分析では以下の前提で固定
- Ⓐ: 横浜教育ビジョン2030「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」
- Ⓑ: 国語科の資質・能力

Ⓒ どのような学習が効果的か

読書に着目するという枠組みの中で、読書のやり方と学力の関係性を分析

Ⓓ どのように学習を促すか

読書環境と読書量・質の関係について分析

追加仮説の幅だしの観点

5W2Hと読書環境の観点で幅だしを行い、具体アクションを見据えた上で、分析すべき追加仮説を検討

Who	誰が読んだか	: 低学年/中学年/高学年/中高生
What	何を読んだか	: ジャンル/難易度
When	いつ読んだか	: 時間帯/時期/他の活動との前後関係
Where	どこで読んだか	: 家庭/学校の授業/図書館
Why	なぜ読書をしているか	: 動機/目的意識
How	どのように読んだか	: 媒体 (紙/電子書籍)、読書スタイル (飛ばし読み/読了/ハイライト/検索/メモ/アウトプット)
How many	どれだけ読んだか	: 本の冊数/ページ数/語読/頻度

- 学校
- 家庭

認知能力 (学力) x 読書のやり方に関する追加仮説候補 (1/2)

: 令和7年度分析対象
: 相関もデータも期待できる
: 相関は期待できるがデータ取得にハードルあり

#	カテゴリ大	カテゴリ中	仮説	この仮説が検証されたらどんなアクションにつながるか	分析に使用するデータ	相関が期待できるか	データが取得できるか
1	What 何を読んだか	ジャンル	児童生徒が利用している図書の分類によって、特定の学力 (教科ごとの設問項目や領域等別分類) との相関が見られる (=想定仮説②)	今後は、目的に応じた選書の仕方も指導する ※但し、必ずしも学力だけが読書の目的ではない点は留意して、指導方法を調整する必要はある	生徒が読んだ本のジャンル • 図書館データ: 蔵書のジャンル • 電子書籍サービスデータ: 本のジャンル • 読書に関するアンケート調査データ: Q3「あなたが手に取る本はどのような本が多いですか?」	—	—
2		難易度	読書の難易度 (易しい本/難しい本) と学力の伸びには相関があり、適切なレベルの本を選んでいる生徒ほど国語力が高まる	学年や習熟度に応じた「適正難易度本リスト」の提示や、読書レベル診断を活用した指導に反映する	本の難易度 • 電子書籍サービスデータ: 書籍の対象学年	△	○
3	When いつ読んだか	時間帯	就寝前や朝の時間に読書をしている生徒の方が、国語力の定着が良い ※時間帯によって集中力が変わることで読書の効果が増大する想定	生活習慣に応じて読書をするのに適切な時間帯を推奨する指導を行う	生徒が読書をした時間帯 (朝/昼/夜/就寝前) • 電子書籍サービスデータ: 利用履歴	△	◎
4		時期	長期休暇中 (夏休み・冬休み 等) にまとまった読書をすると、その後の国語力評価で向上が見られる ※まとまった読書をした後に読書習慣が形成され、その後の学力向上に寄与する想定	学期休暇に合わせた読書課題を設計し、持続的な学習習慣を形成する	読書を行った時期 (平常時/長期休暇中 等): なし ※電子書籍サービスのデータが夏休み期間中だが、その後の学力データがないため現状は分析できない。来年度以降は可能 ※現時点はないが、アンケート項目に追加することで取得可能	△	◎
5	Where どこで読んだか	場所	学校/地域の図書館での読書の方が家庭での読書よりも集中しやすく、同じ読書量で比較した場合、学力が高い傾向にある	学校図書館での読書活動を推進する	読書を行った場所 (家庭/学校/公共施設) • 読書に関するアンケート調査データ: Q4「あなたはどこで本 (電子書籍を含む) を読みますか」	△	◎
6	Why なぜ読書をするか	動機	目的を意識して図書を活用している児童生徒ほど、横浜市学力・学習状況調査における各教科の正答率が高く、学力の伸びが見られ、自分で学び方を考え、工夫している (=想定仮説①)	今後は、より目的を意識した読書をするように指導をする	読書の目的 • 読書に関するアンケート調査データ: Q2「あなたが本 (電子書籍を含む) を読むのはどうしてですか」の回答項目 "調べたいことがあるから"	—	—

認知能力 (学力) x 読書のやり方に関する追加仮説候補 (2/2)

: 令和7年度分析対象
: 相関もデータも期待できる
: 相関は期待できるがデータ取得にハードルあり

#	カテゴリ大	カテゴリ中	仮説	この仮説が検証されたらどんなアクションにつながるか	分析に使用するデータ	相関が期待できるか	データが取得できるか
7	How どのように読んだか	読書スタイル	飛ばし読みを多用する生徒は読解の精度が低く、長文問題の正答率が低下する	精読・要約トレーニングを導入し、理解度を重視した読書習慣を促す	飛ばし読みの有無・頻度: なし ※現時点はないが、電子書籍サービスまたはアンケートから取得の可能性	△	△
8			「読書の質」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は高学年ほど見られる (=想定仮説③)	学年を経るごとに読書の質に関する読書指導を増やす	読了率 (最後まで読み切ったか否か): なし ※現時点はないが、電子書籍サービスまたはアンケートから取得の可能性	△	△
9			ハイライトをする等、本の重要部分に注目して読む生徒は、要約力や文章構成力が高く、国語力の伸びにつながる	学校での読書活動に「ライン引き・要点まとめ」指導を取り入れる	読書中にライン引きや要点整理をした回数・有無: なし ※現時点はないが、電子書籍サービスまたはアンケートから取得の可能性	△	△
10			読書中に分からない言葉を調べながら読む生徒は語彙力が高まり、国語力全般に好影響がある	電子辞書の活用を推奨し、「わからない言葉を放置しない読書習慣」を指導する	読書中に調べ物をした回数・有無: なし ※現時点はないが、電子書籍サービスまたはアンケートから取得の可能性	△	△
11			読んだ内容をメモしたり、読書内容をまとめながら読む生徒は理解の定着度が高く、作文力や表現力も向上する	読書ノートや感想文活動を活用し、思考を整理する習慣を強化する	メモや要約をした回数・有無: なし ※現時点はないが、電子書籍サービスまたはアンケートから取得の可能性	△	△
12			読書を通じて得た知識を発表・作文に活かす生徒は思考力が深まり、学力全般が伸びる	読書発表会やディスカッションを取り入れ、読書を「知識の活用」に結びつけ	読んだ内容を発表/作文に活用した回数・有無: なし ※現時点はないが、アンケート項目に追加することで取得可能	△	△
13	How many どれだけ読んだか	分量	「読書の量」と「学力 (言語能力)、学び方に関する意識」との相関は、低学年ほど強く見られる (=想定仮説③)	低学年のうちは読書の量を増やす指導をする	読書冊数/ページ数/語数 • 電子書籍サービスデータ: 利用履歴 • 読書に関するアンケート調査データ: Q5「あなたは先月一か月の間に、本 (電子書籍を含む) を何冊読みましたか」	—	—
14		頻度	毎日継続的に読書をしている生徒は、断続的な読書の生徒よりも国語力の定着が安定している	「毎日15分読書」等の継続習慣を学校・家庭で推進する	読書頻度 (毎日/週数回/月数回) • 読書に関するアンケート調査データ: Q7「あなたは本 (電子書籍を含む) を、1日にどれくらいの時間読みますか」	○	△

読書量・質 x 読書環境に関する追加仮説候補

: 令和7年度分析対象
: 相関もデータも期待できる
: 相関は期待できるがデータ取得にハードルあり

#	カテゴリ大	カテゴリ中	仮説	この仮説が検証されたらどんなアクションにつながるか	分析に使用するデータ	相関が期待できるか	データが取得できるか
1	家庭		読書を家庭で奨励されている児童生徒は、読書量・質ともに高い	保護者に対して家庭での読書支援の方法を啓発する	家庭環境アンケートデータ (保護者の読書習慣、家庭での読書支援状況 等): なし ※現時点はないが、アンケート項目に追加することで取得可能	◎	△
2	学校	電子	電子書籍を利用する生徒の方が紙を含む読書量の総量が伸びている。結果として、学力が向上する。	利用方法を説明する、授業で活用する等、電子書籍の利用を推奨する	電子書籍の利用度合い • 電子書籍サービスデータ: 利用履歴 読書冊数 • 読書に関するアンケート調査データ: Q5「あなたは先月一か月の間に、本 (電子書籍を含む) を何冊読みましたか」	○	◎
3		紙	図書館の利用環境 (司書の支援、アクセスのしやすさ等) が、読書量・質に影響している	図書館の利用時間や支援体制を充実させる	学校図書館環境の定性評価データ (図書館司書の配置有無、開館時間、図書のジャンル充実度 等) • 学校図書館データ - Q5: 学校司書が授業に参加した回数 - Q15: 放課後、学校図書館を開館していますか - Q18: 学校図書館の環境整備・読み聞かせ等に関わるボランティアの人数	—	—
			図書館の蔵書数が多いほど、生徒の読書量が増える。特に、蔵書のジャンルが偏りなく存在しているほど、より多くの生徒が読書をしている	幅広いジャンルの蔵書を計画的に拡充する	学校図書館の蔵書データ • 学校図書館データ - Q20~28: 学校図書館の蔵書配分比率	—	—
		共通	人気のある本、興味のある本を推薦することで読書量が増える	電子書籍の閲覧履歴から人気のタイトルやジャンルを推薦する	タイトル • 電子書籍サービスデータ: 利用履歴 読書冊数 • 読書に関するアンケート調査データ: Q5「あなたは先月一か月の間に、本 (電子書籍を含む) を何冊読みましたか」	○	△

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

ア 研究仮説についての検討

イ データ分析方針の検討

ウ データのクレンジング

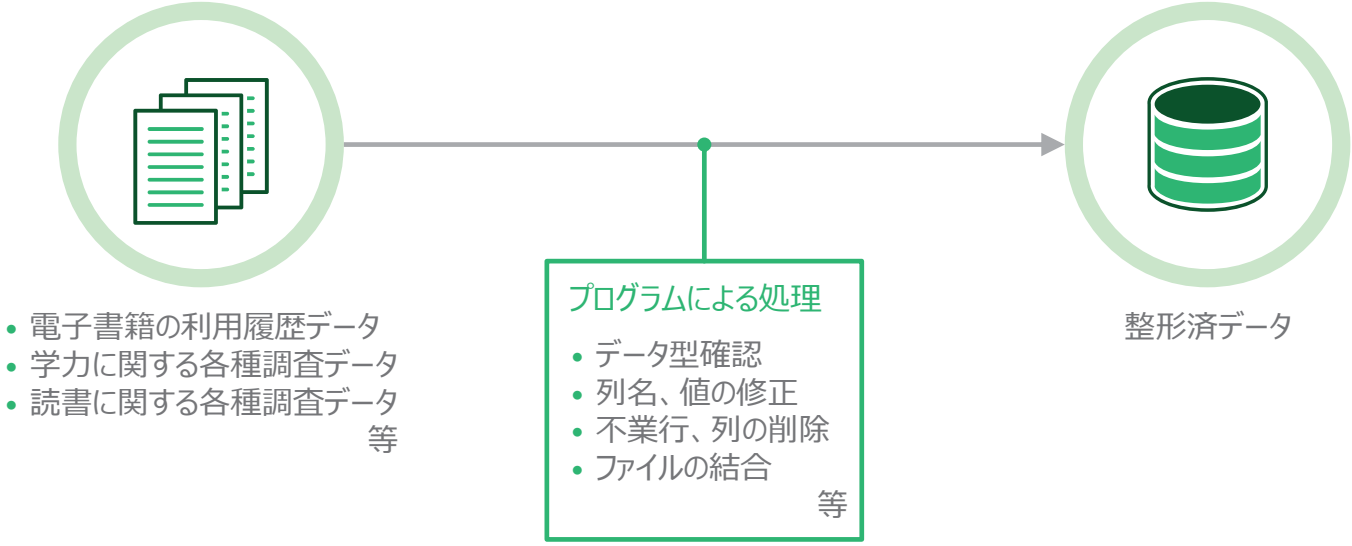
エ データの分析

オ 分析結果の整理、取りまとめ

カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

プログラムを用いて電子書籍の利用履歴データ、学力・読書に関する各種調査データを集計分析可能なデータに整形



参考) 分析に使用したデータ概要

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア 研究仮説についての検討
- イ データ分析方針の検討
- ウ データのクレンジング
- エ データの分析
- オ 分析結果の整理、取りまとめ
- カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

分析内容一覧

	分析の観点				仮説/分析結果	想定アクション
(C) どのような学習(読書)が能力向上に効果的か	能力	ⓧ	読書のやり方			
	認知能力(学力)	who: 学年	what: ジャンル	1	電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力テストの点数を見ると、特定の科目とだけ強く相関するジャンルは見られなかった	なし (電子書籍データの取得期間を延ばして再度検証を行う。今回は夏期休暇だったため傾向が見えにくかった可能性)
			How many: 閲覧冊数	2	紙と電子書籍全体の閲覧冊数で分析すると、閲覧冊数が多い方が国語の学力テストの点数が高い傾向がどの学年にも見られる	読書量を増やすための施策を行う (Dを参照)
			How: 読了率	3	NA (データが取得できないため、本年度は分析しない)	
	非認知能力(共感性)		what: ジャンル	4	電子書籍の文学ジャンルの閲覧冊数が多い方が共感性が高い傾向だが、他のジャンルを含めた結果と関係の強さは変わらない	なし (電子書籍データの取得期間を延ばして再度検証を行う。今回は夏期休暇だったため傾向が見えにくかった可能性)
			How many: 閲覧冊数	5	紙と電子書籍全体の閲覧冊数で分析すると、閲覧冊数が多い方が共感性が高い傾向にある	読書量を増やすための施策を行う (Dを参照)
			How: 読了率	6	NA (データが取得できないため、本年度は分析しない)	
(D) どのように学習(読書)を促すか	読書	ⓧ	意識・環境			
	読書の量	who: 学年	学び方の意識	7	「学習意欲」「学びの応用意識」「コミュニケーション意識」の高さと、紙・電子書籍全体の閲覧冊数は相関関係にある	なし (因果がどちらにあるのか分からず、アクションには落ちづらい)
			読書の目的意識	8	低学年は目的意識による読書量の差は見られないが、高学年の方が自発的な動機がある生徒の方が読書量が多い傾向にある	調べるための読書だけでなく、生徒の自発的な読書につながるように、興味関心にあった選書を支援する
			図書館アクセスのしやすさ	9	NA (データが取得できないため、本年度は分析しない)	
	読書の質		学び方の意識	10		
			読書の目的意識	11		
			図書館アクセスのしやすさ	12	NA (質は電子書籍データの話であり、図書館とは関係なし)	

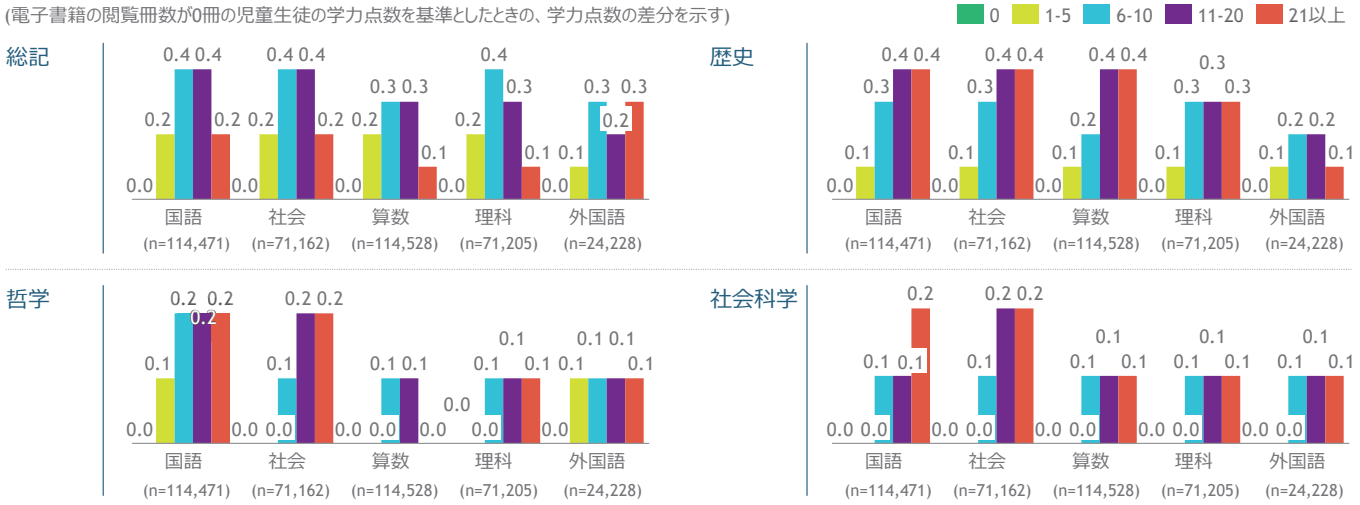
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

① 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない。但し、総記と哲学と歴史と社会科学は、全科目の点数が高くなる傾向にある

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



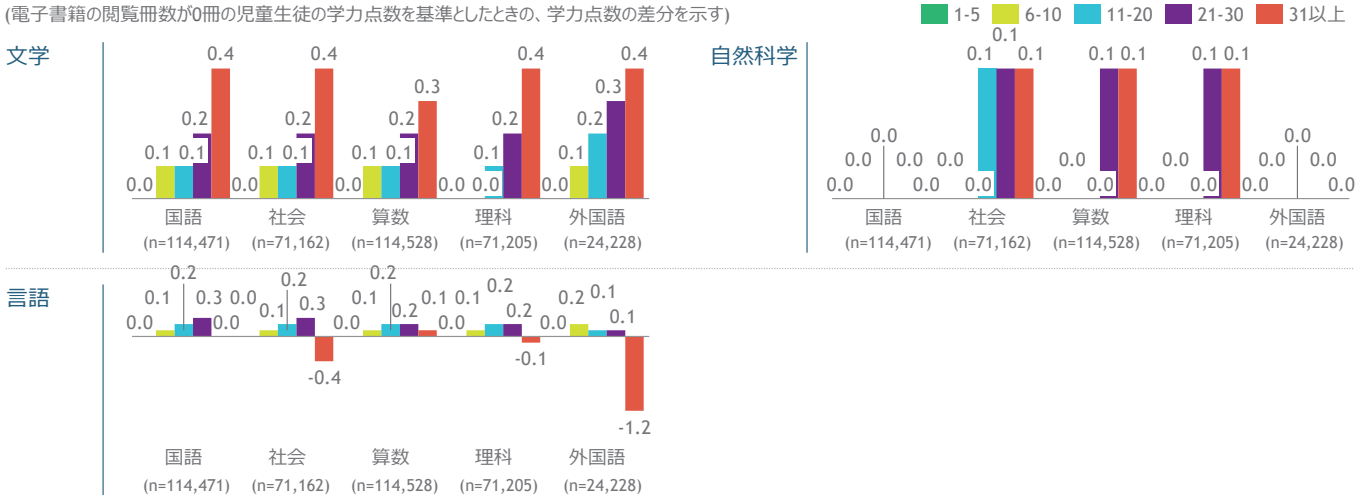
Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年9月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

① 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない。但し、文学と自然科学は、全科目の点数が高くなる傾向にある

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



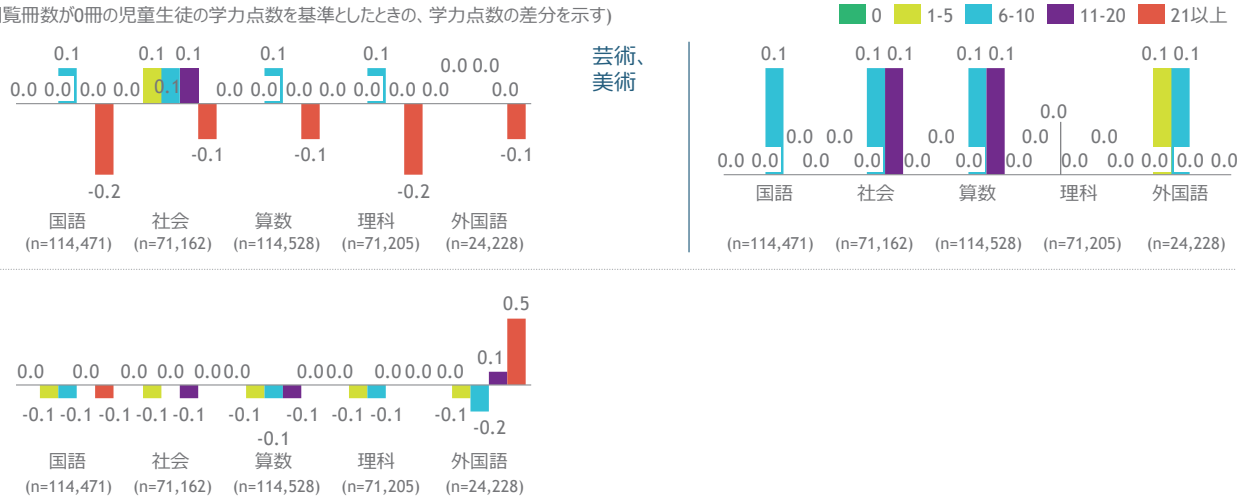
Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年9月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

1 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



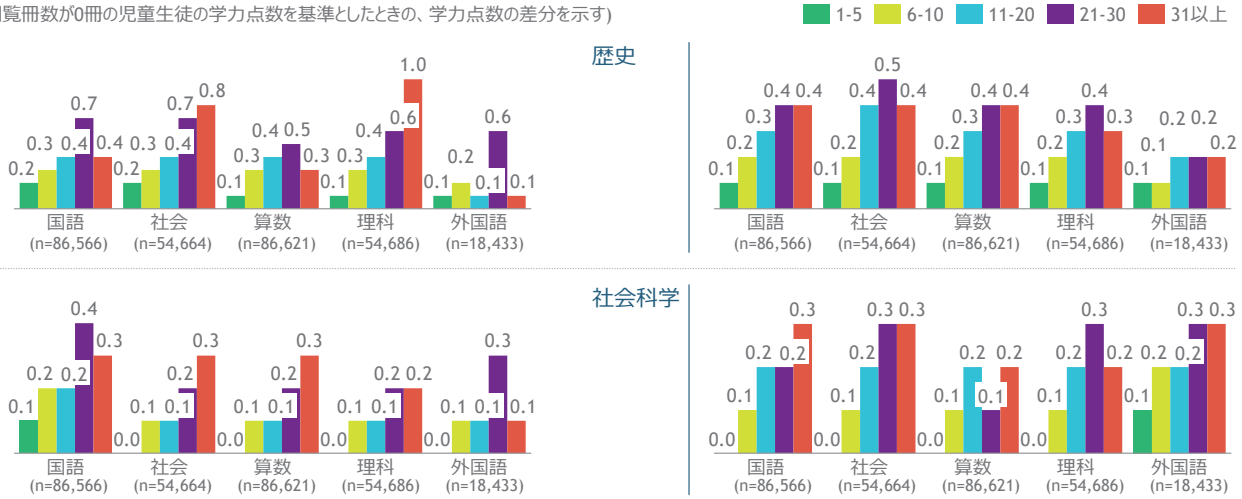
Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年9月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

1 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない。但し、総記と哲学と歴史と社会科学は、全科目の点数が高くなる傾向にある

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



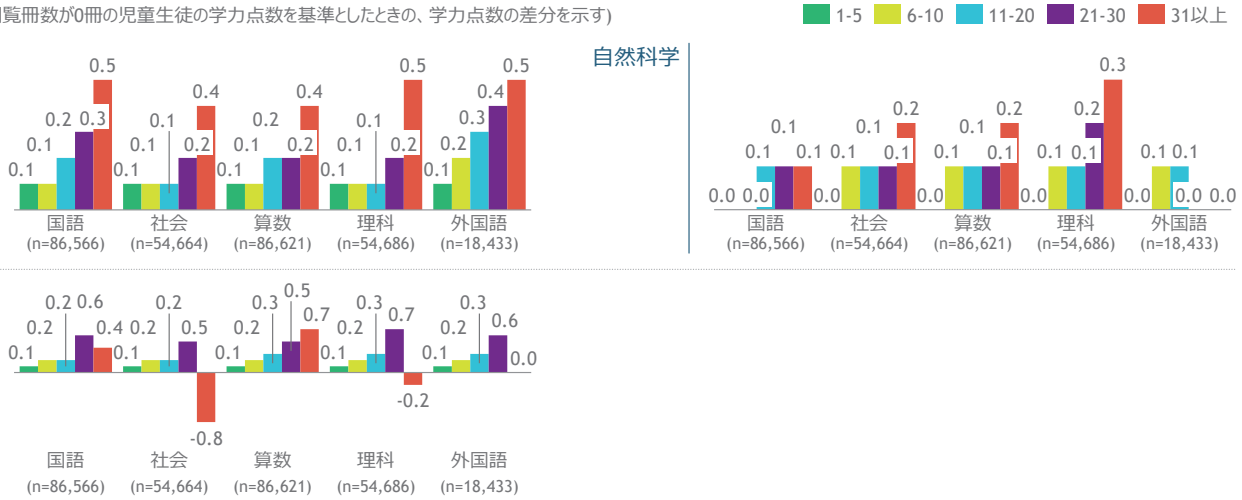
Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年7-8月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

1 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない。但し、文学と自然科学は、全科目の点数が高くなる傾向にある

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



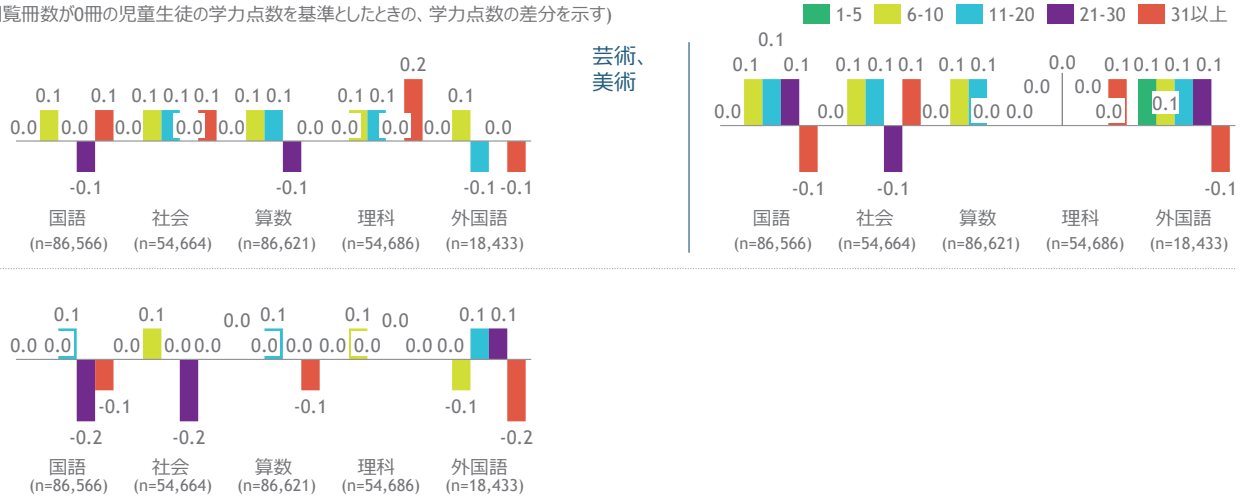
Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年7-8月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

1 電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごと学力・学習状況調査の点数をみると、特定の学力とだけ強く相関するジャンルは見られない

ジャンルごとの読書量 × 学力

電子書籍の閲覧ジャンルと科目ごとの学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)



Note: 異なる学年のテストの点数を集約するため、点数をZスコア = (点数 - 同じ学年・教科の点数の平均) / (同じ学年・教科の点数の標準偏差) に変換したものを使用、2025年7-8月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

②【紙・電子書籍含む全体】の閲覧冊数が増えるほど、学年に関係なく、国語の学力テストの点数が高い傾向にある。但し、全体の相関としては弱い

紙・電子全体の読書量 × 国語の学力 (1/2)

分析前提

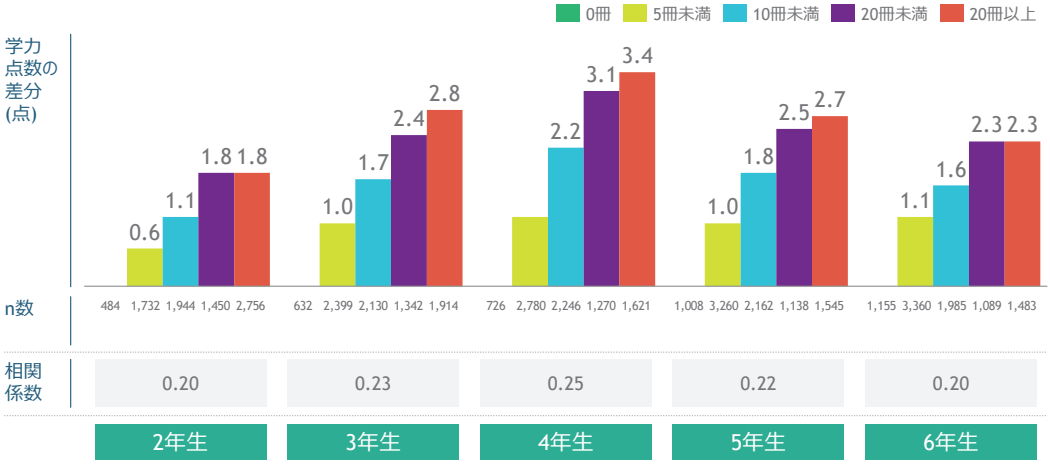
仮説にある学力 (言語能力) を国語の学力テストの点数として分析

- 国語の学力テストの項目には、「説明的な文章」「文学的な文章」「情報活用」が含まれる

その上で、傾向の強さは、相関係数を確認

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数と学年ごとの国語の学力点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の学力点数を基準としたときの、学力点数の差分を示す)

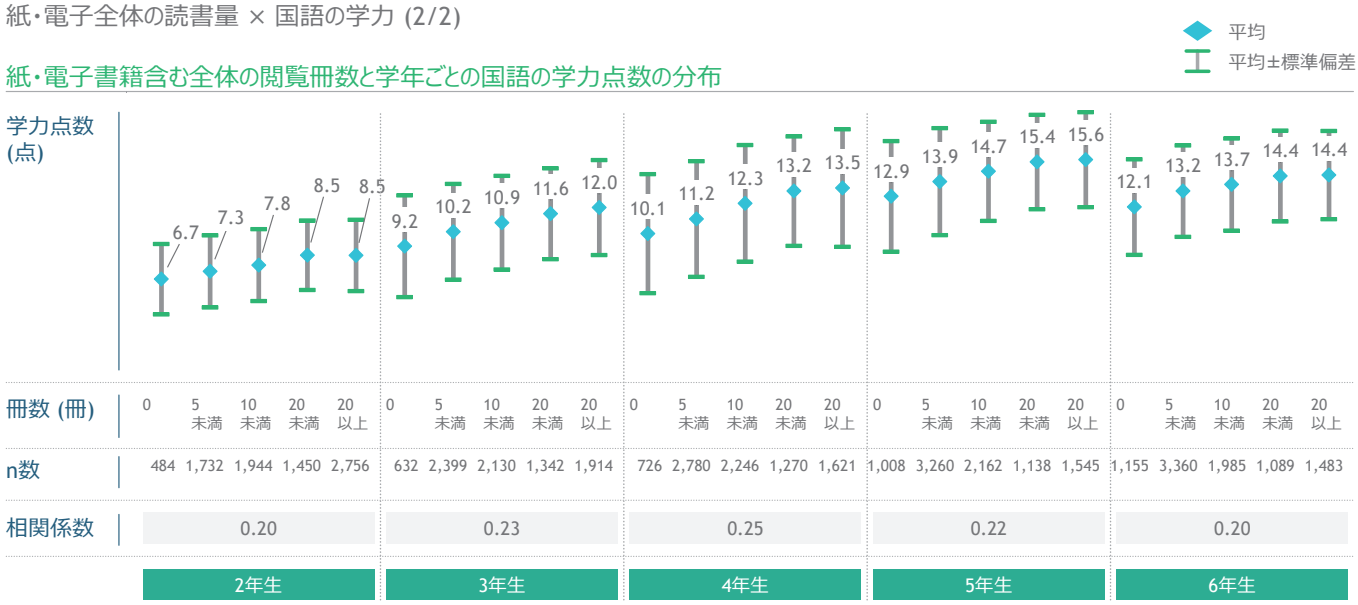


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

②相関が弱い理由は、閲覧冊数ごとの学力点数の差分よりも、閲覧冊数ごとの中での点数のばらつきが大きいため

紙・電子全体の読書量 × 国語の学力 (2/2)

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数と学年ごとの国語の学力点数の分布



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

45 読書量が増えると認知的共感性は緩やかに増える傾向にあり、特に6年生の「相手の立場になって考える」ことは0冊では約6割が共感性が低いが、読書量に応じて高まる傾向にある

紙・電子全体の読書量 × 非認知能力 (1/2)

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

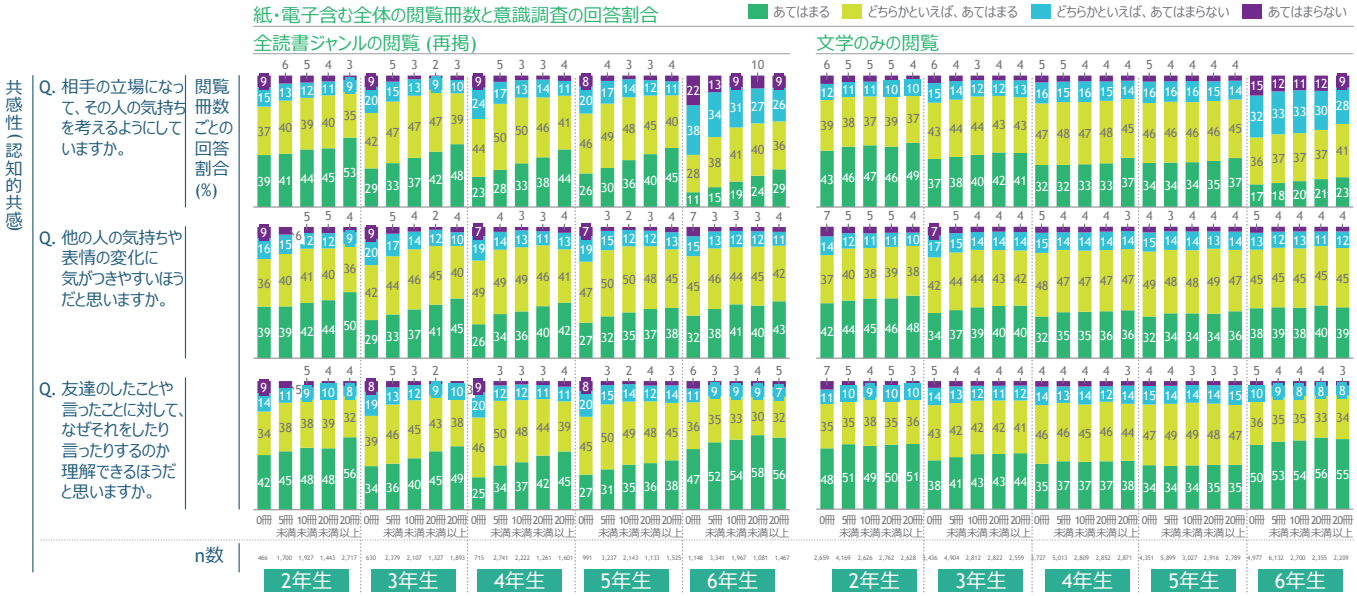
45 読書量が増えると情動的共感性は緩やかに増える傾向にある。増加傾向は学年によって大きな差はない

紙・電子全体の読書量 × 非認知能力 (2/2)

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

45 読書のジャンルを文学に絞ってみても傾向は変わらない。但し、ジャンルを分けたものは、電子書籍データの閲覧のみに絞られるため、データが限定的な可能性

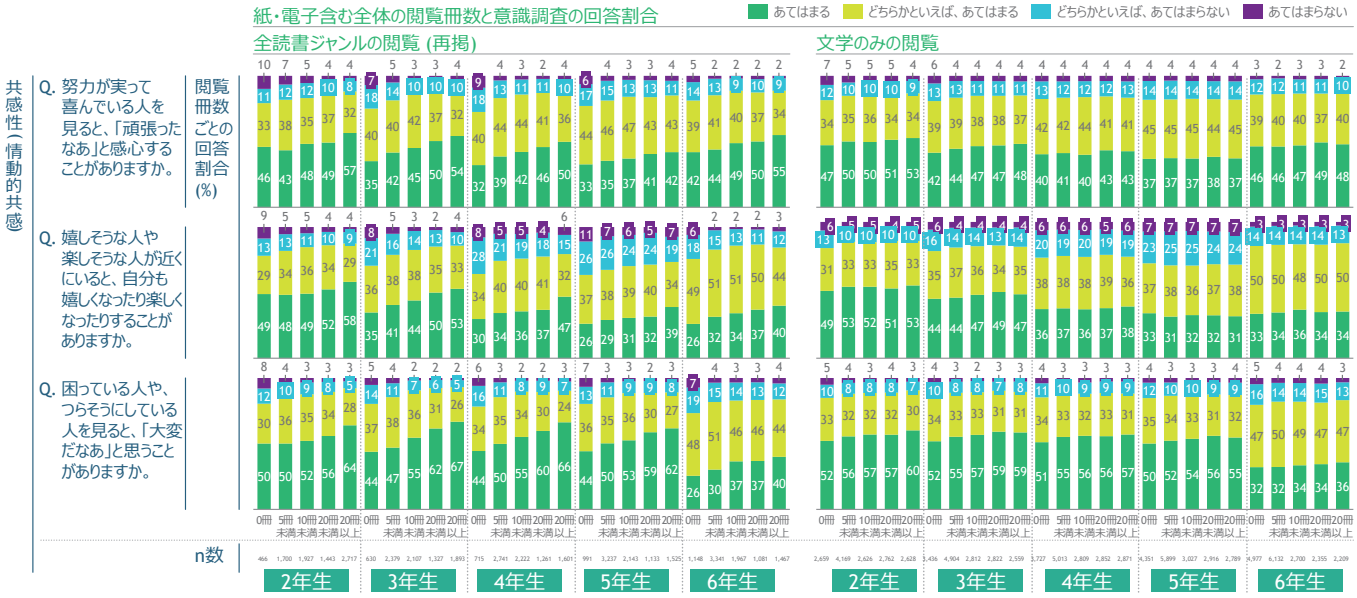
電子の読書量 × 非認知能力 (1/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

45 読書のジャンルを文学に絞ってみても傾向は変わらない。但し、ジャンルを分けたものは、電子書籍データの閲覧のみに絞られるため、データが限定的な可能性

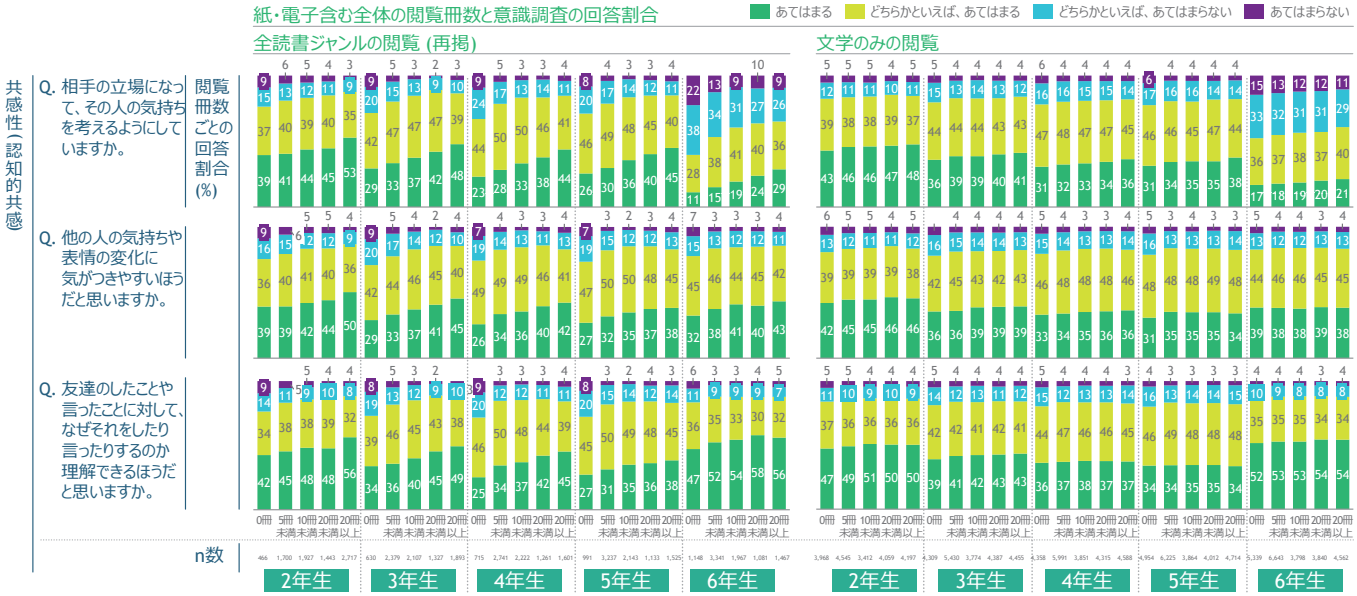
電子の読書量 × 非認知能力 (2/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

45 読書のジャンルを文学に絞ってみても傾向は変わらない。但し、ジャンルを分けたものは、電子書籍データの閲覧のみに絞られるため、データが限定的な可能性

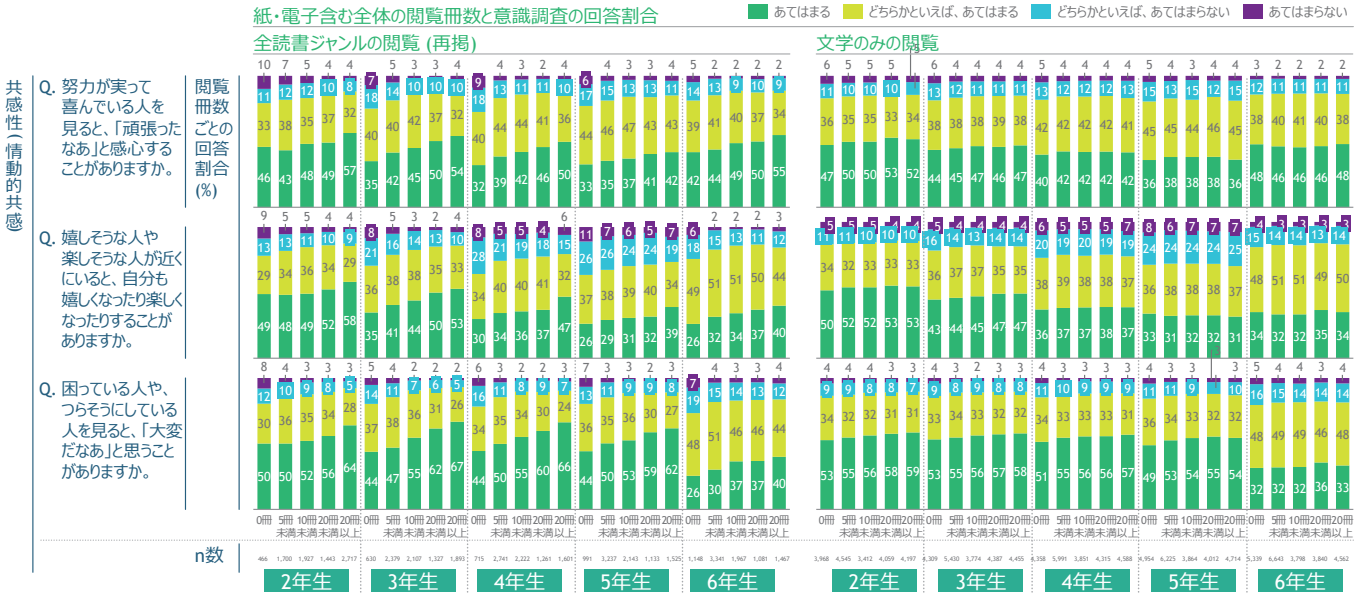
電子の読書量 × 社会情動的コンピテンシー (1/2)



Note: 2025年9月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

45 読書のジャンルを文学に絞ってみても傾向は変わらない。但し、ジャンルを分けたものは、電子書籍データの閲覧のみに絞られるため、データが限定的な可能性

電子の読書量 × 社会情動的コンピテンシー (2/2)



Note: 2025年9月の電子書籍サービスデータを分析
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

7 (前提)学び方に関する意識は、学力・学習調査の意識調査から、「学習意識」「学びの応用意識」「コミュニケーション意識」に関わる項目を抽出

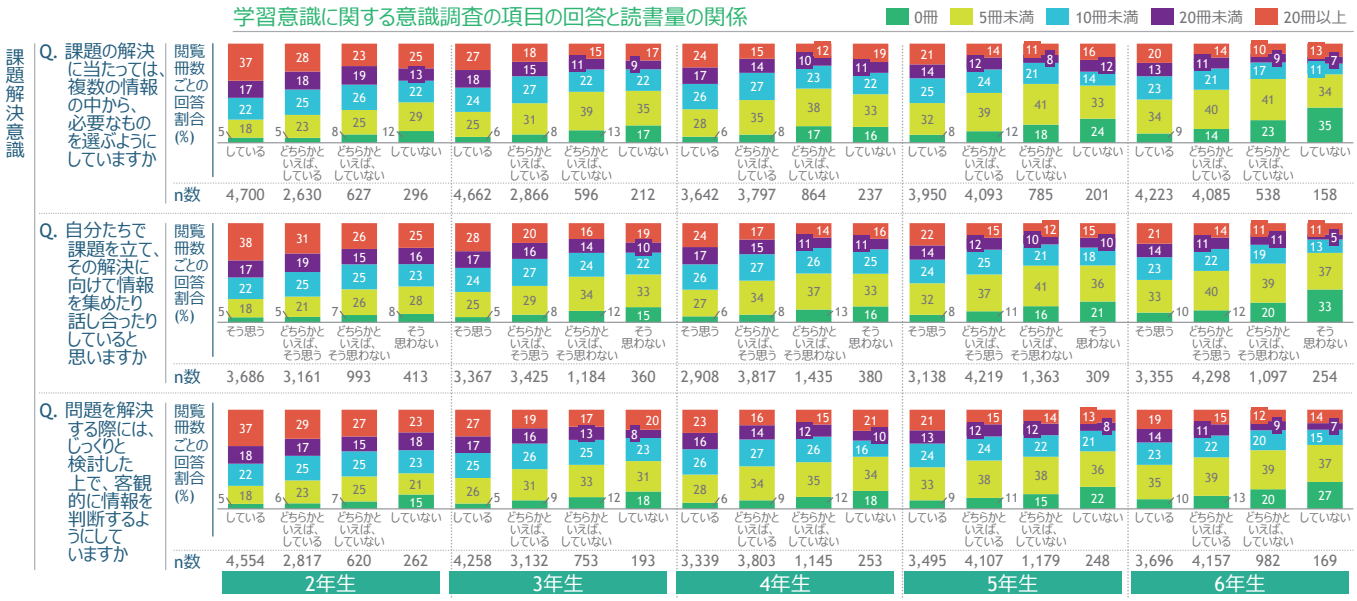
紙・電子全体の読書量 × 学び方に関する意識 (1/4)

学力・学習調査の「意識調査」における「学習意識」に関する項目	項目で明らかになる観点 (BCG追加)
◎ 45 学校での学習に進んで取り組んでいますか	学習意識
◎ 46 学習したことを、日常生活や社会生活の中で活用しようと思いますか	学びの応用意識
◎ 47 自分の考えを、相手に分かるように伝えようとしていますか ◎ 48 学級の友達と話し合う活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりしていますか	コミュニケーション意識
49 学校や家庭で、一日にどのくらい、スマートフォンやタブレット、パソコン等を、学習のために使っていますか 50 タブレットやパソコンを使って、自分の考えをまとめたり、作品や発表資料等を作ったりすることができますか 51 インターネットの特性を理解し、相手の気持ちを考えながら発信しようとしていますか	デバイス/インターネットの活用意識
52 課題の解決に当たっては、複数の情報の中から、必要なものを選ぶようにしていますか 53 自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集めたり話し合ったりしていると思いますか 54 問題を解決する際には、じっくりと検討した上で、客観的に情報を判断するようにしていますか	課題解決意識
55 学習を通して見いだした地域や社会の課題を、自分たちで解決できると思いますか	社会への応用意欲

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

7 「課題解決意識」が高い人ほど閲覧冊数が多くなる傾向にあり、低学年ほど強く見られる

紙・電子全体の読書量 × 学び方に関する意識 (2/3)

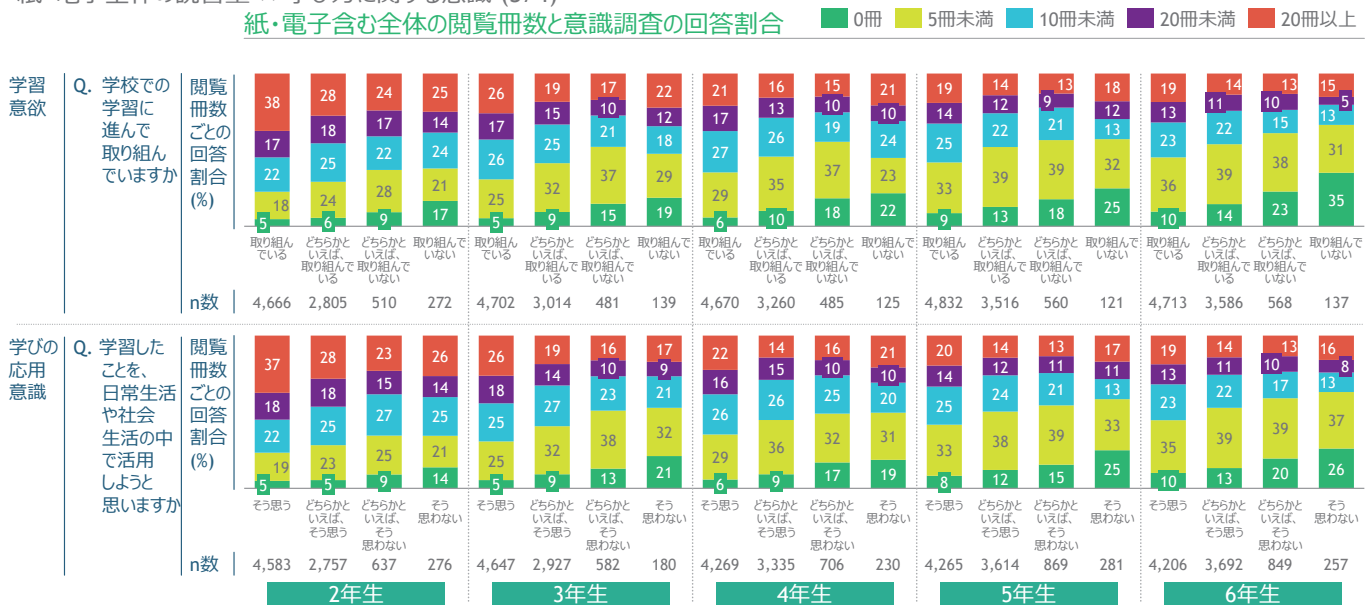


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

⑦参考)「学習意欲」や「学びの応用意識」がある人ほど、閲覧冊数が多い傾向にある。但し因果は不明瞭

紙・電子全体の読書量 × 学び方に関する意識 (3/4)

紙・電子含む全体の閲覧冊数と意識調査の回答割合



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

⑦参考)「コミュニケーション意識」がある人ほど、閲覧冊数が多い傾向にある。特に、低学年ほど強くみられる

紙・電子全体の読書量 × 学び方に関する意識 (4/4)

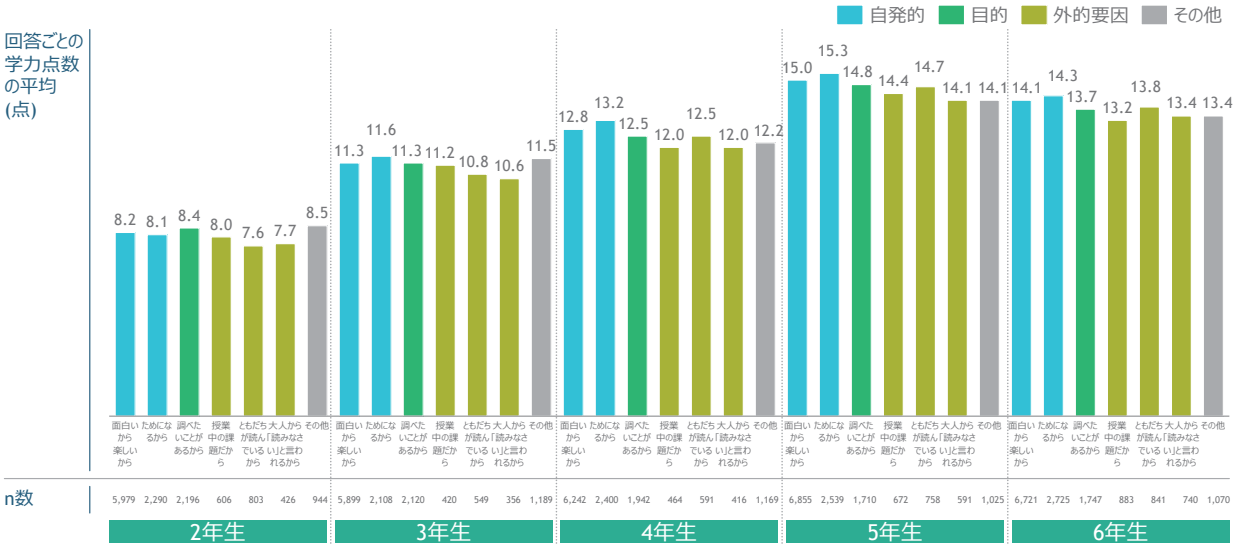
紙・電子含む全体の閲覧冊数と意識調査の回答割合

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

⑧目的意識と国語科の点数の関係をみると、高学年は、自発的な動機で読書をしている児童生徒の方が、点数が高い傾向にある

国語科の点数 × 読書の目的意識

国語科の点数と意識調査の回答割合

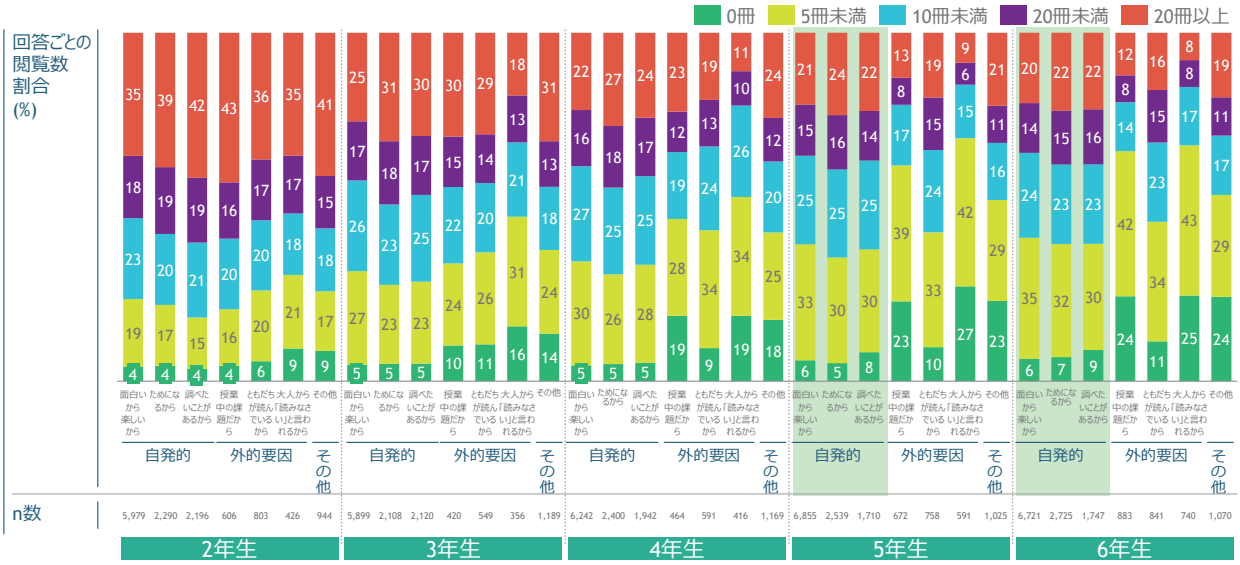


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

⑧目的意識と読書量の関係をみると、低学年は読書量の差は見られないが、高学年の方が自発的な動機がある児童生徒の方が読書量が多い傾向にある

紙・電子全体の読書量 × 読書の目的意識

紙・電子含む全体の閲覧冊数と意識調査の回答割合

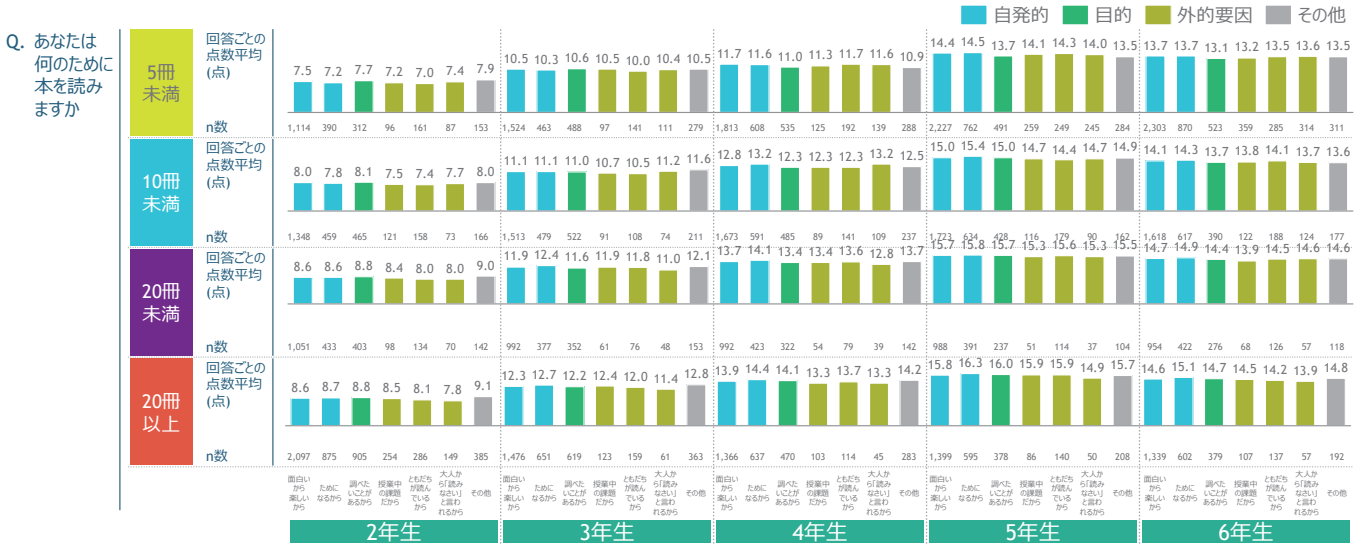


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

⑧同程度の読書量の児童生徒で比較すると、点数の差は大きくない。つまり自発的に読む意識のある人は読書量が多く、結果として国語科の点数に繋がると考えられる

紙・電子全体の読書量 × 国語科の点数×読書の目的意識

紙・電子含む全体の閲覧冊数と意識調査の回答割合

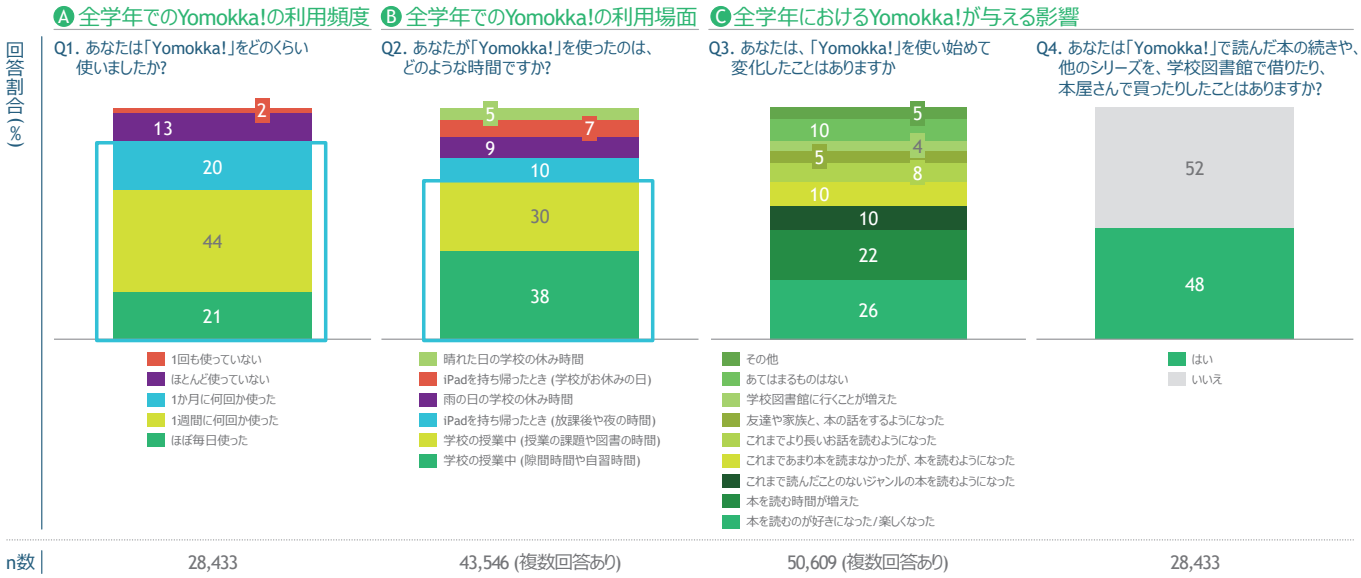


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

追加分析: 読書に関するアンケート調査結果 (電子書籍サービスYomokka!に関する項目)

電子書籍サービスYomokka!は、8割以上が月に複数回以上利用し、授業中での利用が6割と最多。本を読むのが好きになった等の変化があり、半数が紙の図書と併用している

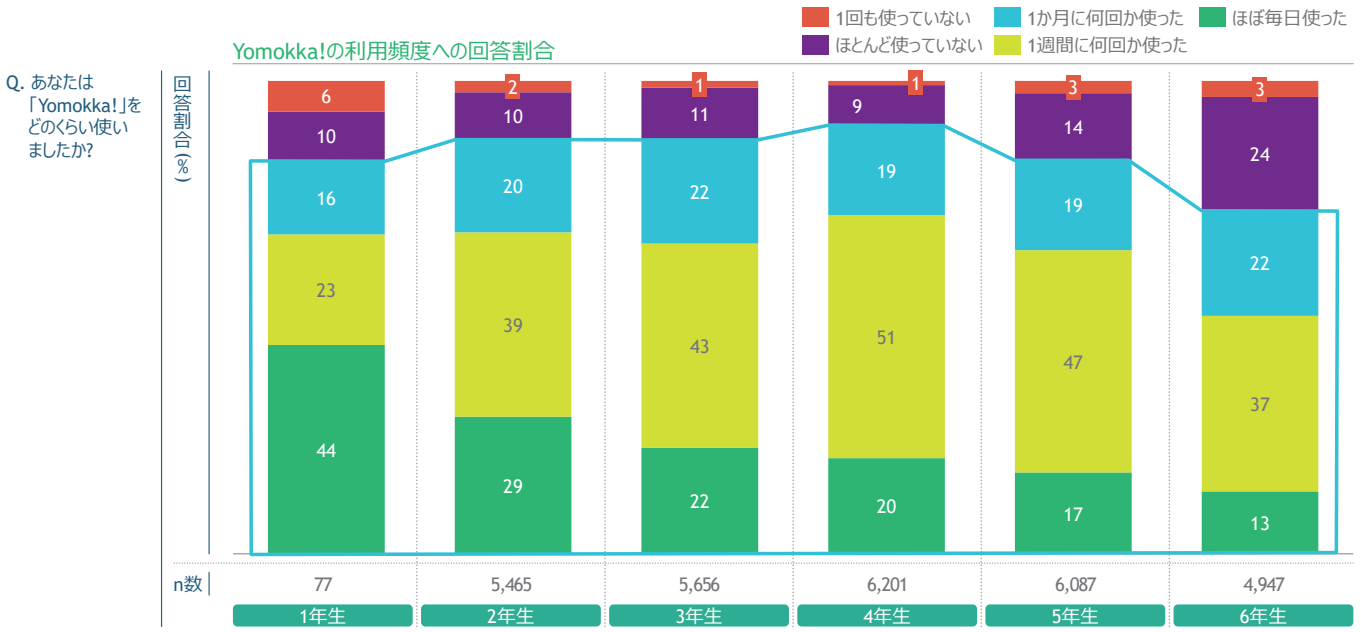
読書に関するアンケート調査結果



Note: 学年不明の回答者 (計130人) を除いた読書に関するアンケート回答データを使用
Source: ボストン コンサルティング グループ分析

Ⓐどの学年も7割以上が週に複数回Yomokka!を使っており、電子書籍の利用が浸透している

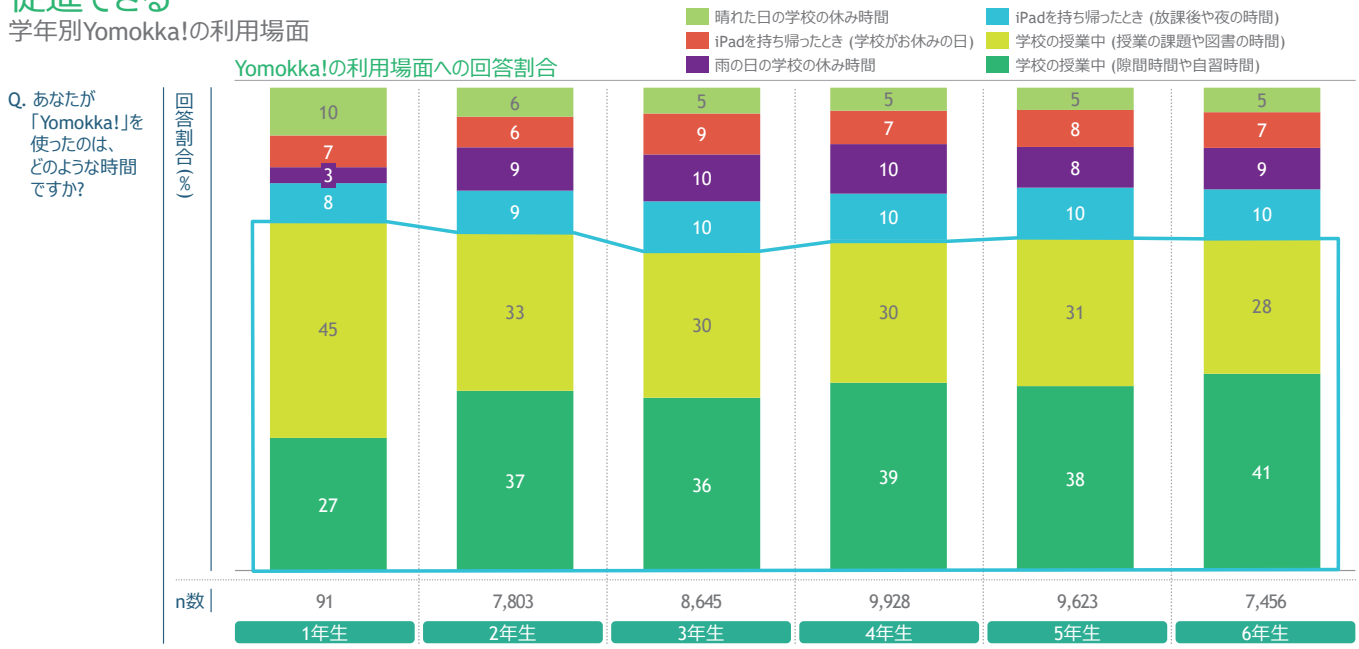
学年別Yomokka!の利用頻度



Source: ボストン コンサルティング グループ分析

Ⓑ どの学年も6割以上が学校の授業中にYomokka!を利用しており、今後放課後等の利用も促進できる

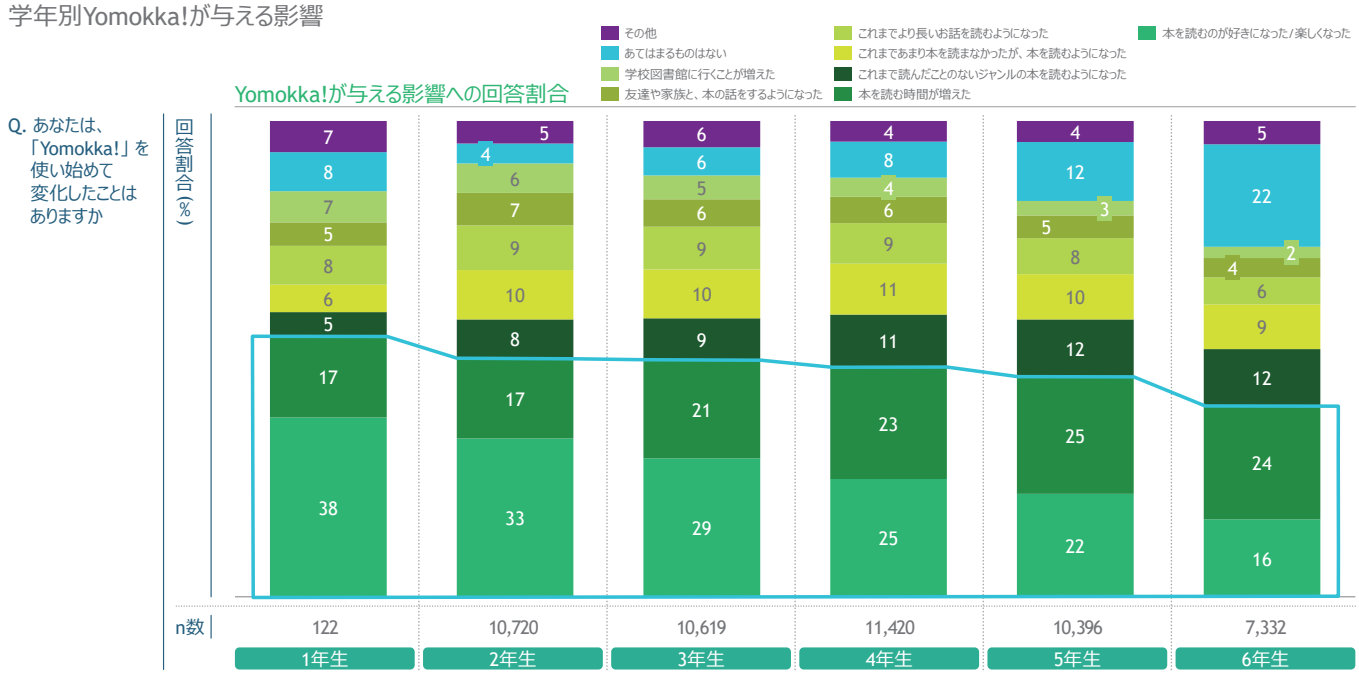
学年別Yomokka!の利用場面



Source: ボストン コンサルティング グループ分析

Ⓒ Yomokka!は、特に低学年に対して、本を好きになる・読書時間の増加等の効果が高い

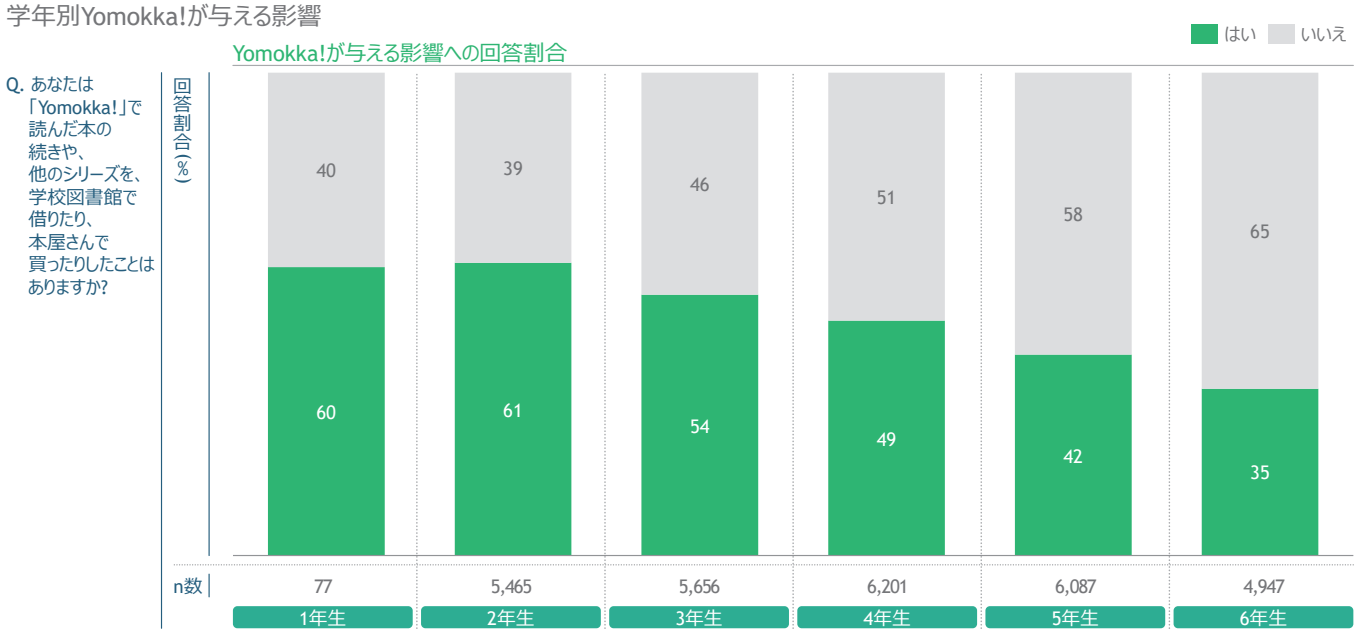
学年別Yomokka!が与える影響



Source: ボストン コンサルティング グループ分析

C 低学年ほど電子書籍の続きを紙の書籍でも読む割合が高い。電子書籍を本に興味をもつきっかけとして使い、学校図書館の利用を促進することで、全体の読書量を増やせる

学年別Yomokka!が与える影響



Source: ボストン コンサルティング グループ分析

追加分析: 2025年11月実施の「はまっ子読書の日」取り組み

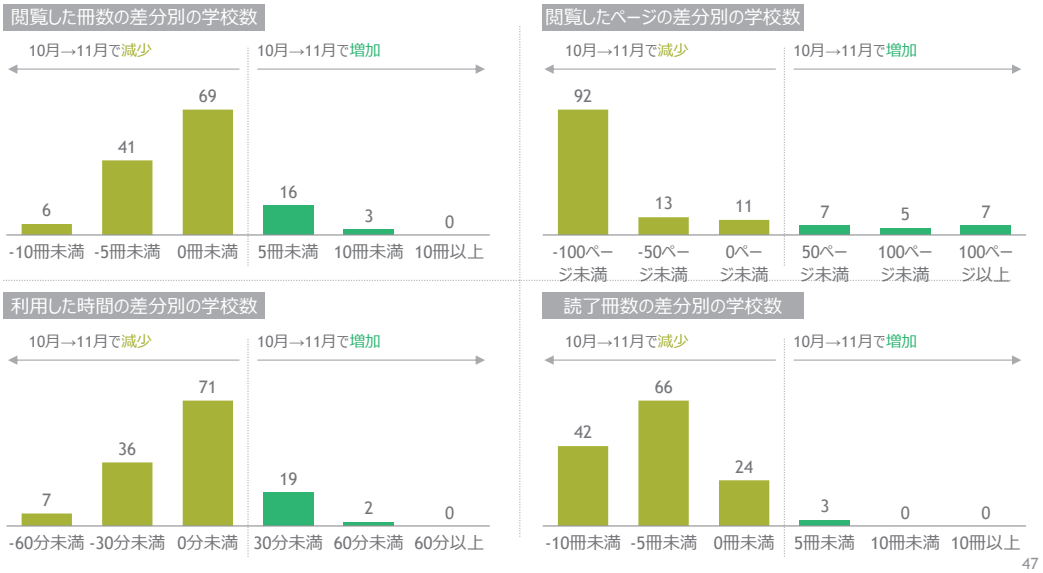
「はまっ子読書の日」の取組が行われた11月の読書量を10月の読書量を電子書籍で比較すると、11月の読書量の方が減少している学校が多い

「はまっ子読書の日」取り組み分析 (1/4)

分析の前提

- 横浜市では11月に読書を促す「はまっ子読書の日」を実施
- 効果を確認するため、取組が行われた11月とその前月の10月の読書量の差分を分析

分析結果

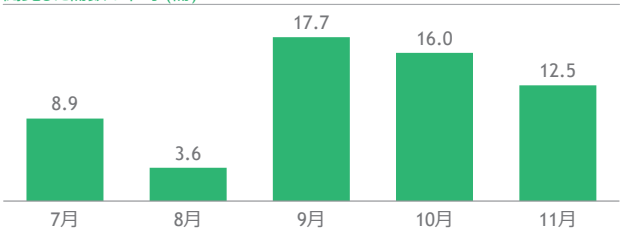


出所: ボストン コンサルティング グループ分析

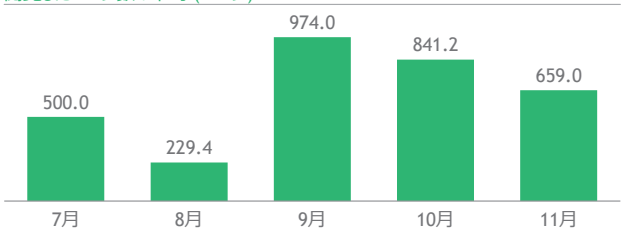
減少理由1: 電子書籍の読書量は7~9月まで増加していたが、10月以降は減少傾向。導入当初は興味関心が高かったものの、時間の経過とともに落ち着いてきた可能性がある

「はまっ子読書の日」取り組み分析 (2/4)

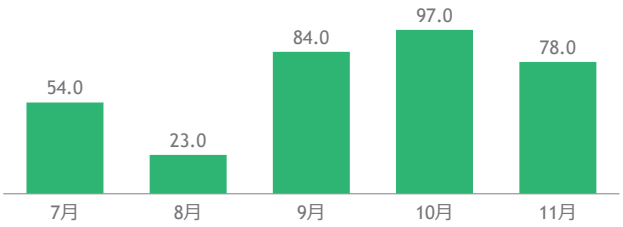
閲覧した冊数の平均 (冊)



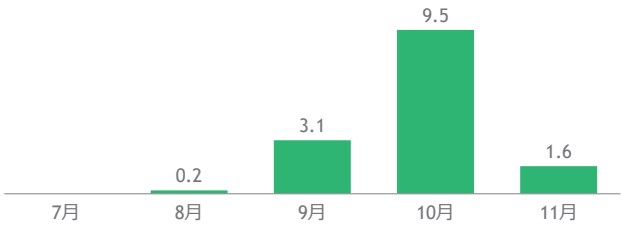
閲覧したページ数の平均 (ページ)



利用した時間の平均 (分)



読了冊数の平均 (冊)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

減少理由2: 電子書籍よりも紙の書籍の利用を促進する取組の方が多く、相対的に電子書籍の利用が減少した可能性がある

「はまっ子読書の日」取り組み分析 (3/4)

	紙の書籍の利用を促進する取組	電子書籍の利用を促進する取組	紙の書籍・電子書籍両方の利用を促進する取組
取組をした学校数 (全135校)	48	6	130
取組例	• 図書館の利用促進 - 貸出可能な冊数を増やす - 貸出冊数に応じた景品 • 図書館を活用したイベント - 図書館での宝探し • 本の展示 - おすすめ本コーナーの設置 • 紙の書籍に紐づくインセンティブ - しおりのプレゼント	• Yomokka!による読書推進 - タブレットを持ち帰ってもらう - Yomokka!を活用したペア読書	• 読書ビンゴ • 読書パズル • 読書ポイントカード • 読書スタンプラリー • 本のクイズ • 本の読み聞かせ • おすすめ本紹介 • 読書集会

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

10月から11月にかけて電子書籍の読書量が増えていた学校と減っていた学校の間に取組の違いは見えず、より詳細なヒアリングが必要

「はまっ子読書の日」取り組み分析 (4/4)

10月から11月にかけて電子書籍の読書量が増えていた19校の取組一覧

緑字: 10月から11月にかけて電子書籍の読書量が減少していた学校には見られなかった取組

<ゲーム化>
- 読書パズル
- 読書ビンゴ
- 読書ガチャ
- 読書クイズ
- 読書ポイントカード
- 読書スタンプラリー、ポイントラリー
- 読書の木
- 読書郵便
- 読書かるた

<景品付与>
- スタンプカード (学校図書館に足が向くように、期間内に3冊借りたら学校図書館でのバーコードリーダーの読み取りができる特典を付けた)
- 期間中、借りた本の冊数に応じて特典を設けて行った。3冊借りると図書委員会のお仕事体験か手作りしおりか手作りシールをプレゼント。5冊借りるとしおりかシールの手作り体験
- はまっこ読書月間を11/10～12/5に設定し、図書委員会主導のもとスタンプラリーを行った。達成者の多いクラスは学校図書館に新しい本をリクエストできる
- しおり、2冊貸出券、2週間貸出券などの景品

<イベント開催>
- 図書集会
- 読書運動会
- 全校読書タイム

<読み聞かせ>
- 中学生の委員会からの読み聞かせ
- 委員会児童による読み聞かせ、動画 (日本語、英語、中国語)
- テレビ放送による読み聞かせ
- 教職員による読み聞かせ
- 朝読みボランティアさんによる読み聞かせ
- かながわこどもひろばの皆さんによるおはなし会

<本の紹介・展示>
- ポスター掲示
- 委員会児童による新刊本紹介ポスター作製
- 人気の本ランキングの発表
- 給食メニューに関連した図書紹介
- 図書委員のおすすめの本紹介
- 教職員おすすめの本紹介・展示

<読書啓発>
- 図書委員による読書週間の取り組み
- 国語の単元を通して司書が学習支援のもと、読書啓発の授業を行った
- 図書館にはまっこ読書の日啓発の掲示・委員会にて
- 市立図書館との連携によるもの (ブックトークのやり方のレクチャー)

<アクセス改善>
- 移動図書館 (クラスと学校図書館が棟が違って遠いので、クラス近くに学校図書館から図書を移動させて、借りられるようにした)

<ICT活用>
- Yomokkaでの読書促進
- タブレット持ち帰りでyomokkaで読書

<コンクール参加>
- 日本絵本賞ポップ交流サイト 応募

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

朝 (8時台) は50%程度が月1冊以上読んでいる一方、放課後の時間帯は10%未満。放課後については端末の持ち帰り許可等で読書量を伸ばせる余地が存在

電子書籍の読書傾向

時間帯別の1冊以上閲覧した児童の割合 (%)

		7時	8時 (朝読書)	9時	10時 (中休み)	11時	12時 (昼休み)	13時	14時	15時	16時 (放課後)	17時	18時	19時	20時
全体		4	50	46	44	46	32	35	32	9	6	7	7	7	7
月別	9月	4	51	48	48	49	36	40	35	10	6	6	7	7	7
	10月	4	50	47	46	46	32	36	32	10	6	7	8	8	8
	11月	3	48	42	39	43	28	31	30	8	6	6	7	7	6
学年別	1年生	1	32	35	34	37	24	22	17	2	2	3	3	3	3
	2年生	3	49	49	48	51	36	36	30	6	6	7	8	8	7
	3年生	4	54	54	52	53	38	42	38	10	7	8	9	9	8
	4年生	4	56	50	48	49	35	40	40	13	7	8	9	9	8
	5年生	5	53	46	43	45	31	37	36	12	7	7	8	8	8
	6年生	4	51	41	39	40	28	33	31	10	6	6	7	7	7

※ 全体、学年別に関しては、9-11月それぞれで割合を算出した後にその平均を表示
※ 6時まで、21時以降は閲覧冊数の割合が小さいため表から省略
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

電子書籍では文学・絵本といったジャンルの閲覧数が多く、偏りがある。閲覧が少ないジャンルは、学校図書館/紙の書籍で補える可能性あり

電子書籍の読書傾向

ジャンル別の閲覧冊数

■ : 5冊以上

1人1ヶ月あたりの閲覧冊数(冊)

	絵本	文学	自然科学	芸術、美術	技術、工学	産業	社会科学	哲学	歴史	総記	言語
1年生	6.25	4.89	2.39	0.77	0.64	0.58	0.49	0.41	0.22	0.06	0.05
2年生	8.74	7.37	4.01	1.08	0.70	0.77	0.84	0.81	0.57	0.16	0.12
3年生	4.79	7.73	4.33	0.93	0.91	1.28	1.80	0.95	0.96	0.28	0.49
4年生	3.42	8.35	3.38	1.39	0.80	0.51	1.52	0.96	1.22	0.34	0.27
5年生	1.67	8.53	2.53	0.68	0.73	0.44	1.31	0.84	1.66	0.32	0.20
6年生	1.08	8.48	1.38	0.52	0.42	0.26	1.29	0.61	1.66	0.30	0.15

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

- ア 研究仮説についての検討
- イ データ分析方針の検討
- ウ データのクレンジング
- エ データの分析
- オ 分析結果の整理、取りまとめ
- カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

データサイエンスラボ発表資料
(2026年01月19日実施)

BOSTON CONSULTING GROUP

国語科の資質・能力の育成や意識の醸成に寄与する学校での学習活動に関するデータ分析・検討事業

横浜教育データサイエンス・ラボ

2026年1月19日

OPEN YOKOHAMA

ボストン コンサルティング グループ

マネージング・ディレクター
& パートナー
遠藤　英壽

官公庁、地方自治体、学校法人などの
プロジェクトを数多く手掛ける
特に、教育 (K12～高等) 領域の
支援経験が豊富

<主な直近プロジェクト>
- 経産省/未来の教室
- 経産省/学習ログ関連調査
- 文科省/GIGAスクール関連調査
- 渋谷区/未来の学校プロジェクト
- 東京都・京都市/学校BPR　　等

分析前提と留意点: 現時点では因果の分析はできず、分析アプローチと相関の提示としてご理解いただきたい

今年度は、横浜市学力・学習状況調査後に、
読書に関するアンケート調査や電子書籍利用データを取得。
そのため、結果の因果関係まで踏み込めず、あくまで相関として捉える

- 2025年4月 横浜市学力・学習状況調査
- 2025年7月 読書に関するアンケート調査
- 2025年9月 電子書籍利用データ

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

対象者概要: 横浜市の小学校を対象に分析を実施

	対象小学校数	対象生徒数	学年の分布
横浜市学力・学習状況調査結果データ(2025年4月)	340校	135,373名	2年生 19.0%, 3年生 19.5%, 4年生 20.4%, 5年生 20.6%, 6年生 20.5%
読書に関するアンケート調査(2025年7月)	293校	44,490名	1年生 0.4%, 2年生 19.2%, 3年生 19.3%, 4年生 19.7%, 5年生 20.8%, 6年生 20.6%
電子書籍サービスデータ(2025年9月)	327校	103,544名	1年生 9.8%, 2年生 15.6%, 3年生 17.3%, 4年生 18.1%, 5年生 19.9%, 6年生 19.3%

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

分析結果サマリ

テーマ❶ 読書と学力の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、国語の学力・学習状況調査の点数が高い傾向

テーマ❷ 読書と社会情動的コンピテンシー(共感性)の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、共感性が高い傾向

テーマ❸ 読書量を高めるための動機

動機: 低学年では動機による差は見られないが、
高学年は自発的な動機があるほど、閲覧冊数も多い傾向

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

テーマ❶ 読書と学力の関係サマリ

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数が多いほど、
学年に関係なく、国語の学力・学習状況調査の点数が高い傾向にある
（但し、全体の相関係数としては低い）

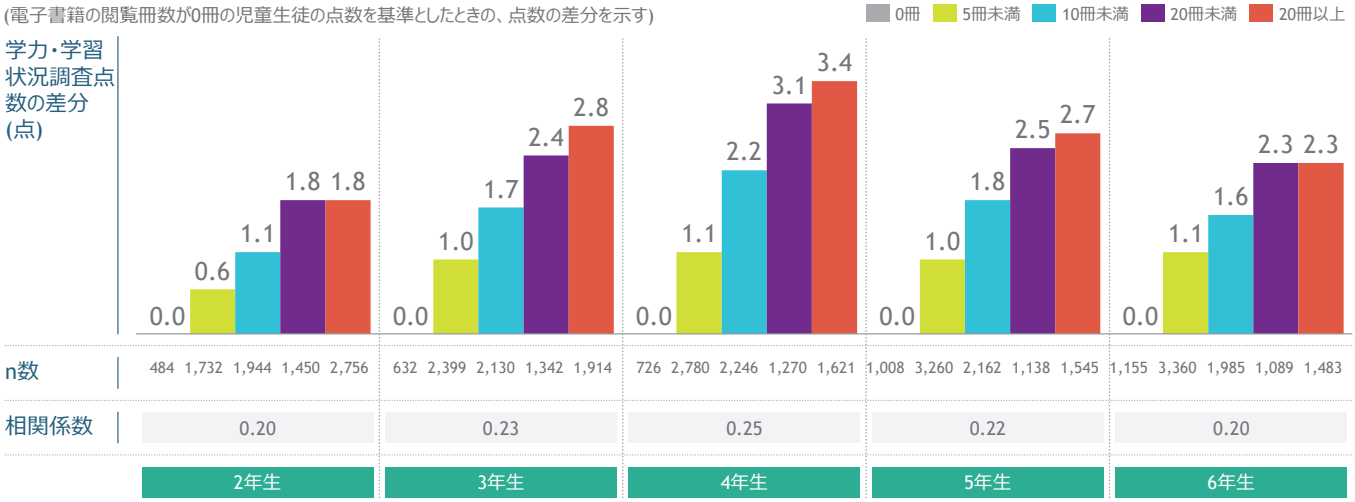
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、国語の学力・学習状況調査の点数が高い傾向にある。但し、全体の相関係数としては低い

紙・電子全体の読書量×学力

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数と学年ごとの国語の学力・学習状況調査の点数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童生徒の点数を基準としたときの、点数の差分を示す)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

テーマ ❷ 読書と社会情動的コンピテンシー (共感性) の関係

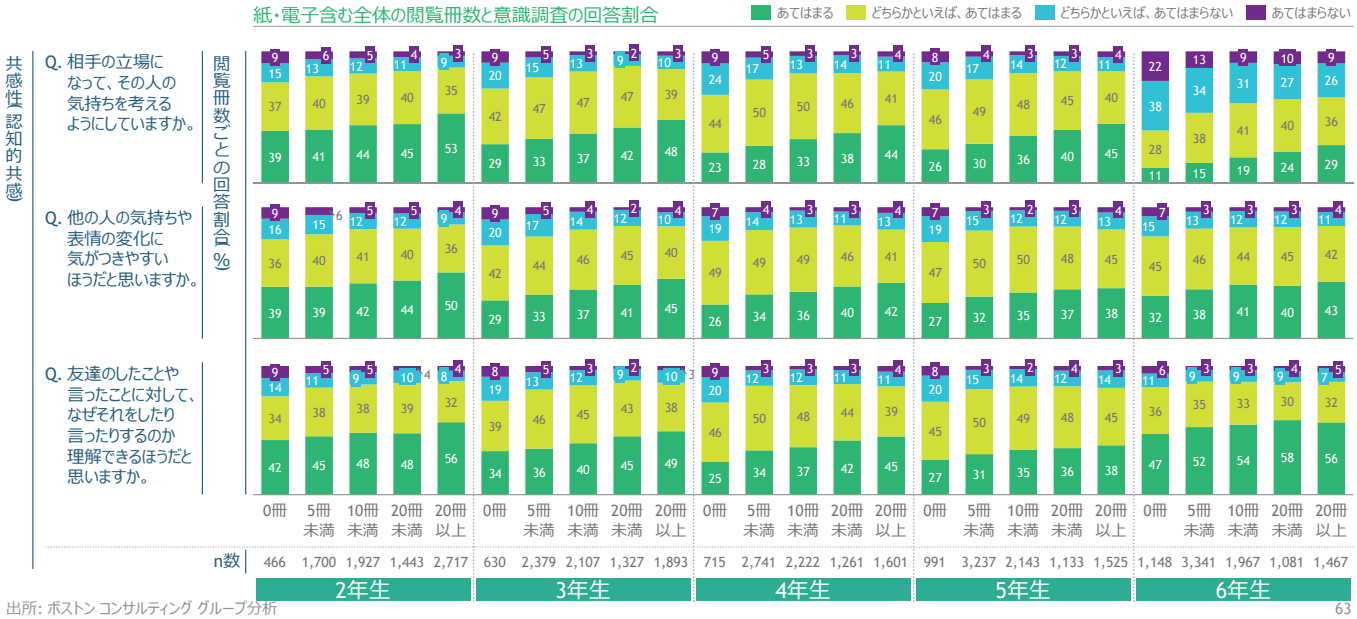
紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数が多いほど、

学年に関係なく、共感性が高い傾向にある

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、認知的共感性は緩やかに高い傾向にある

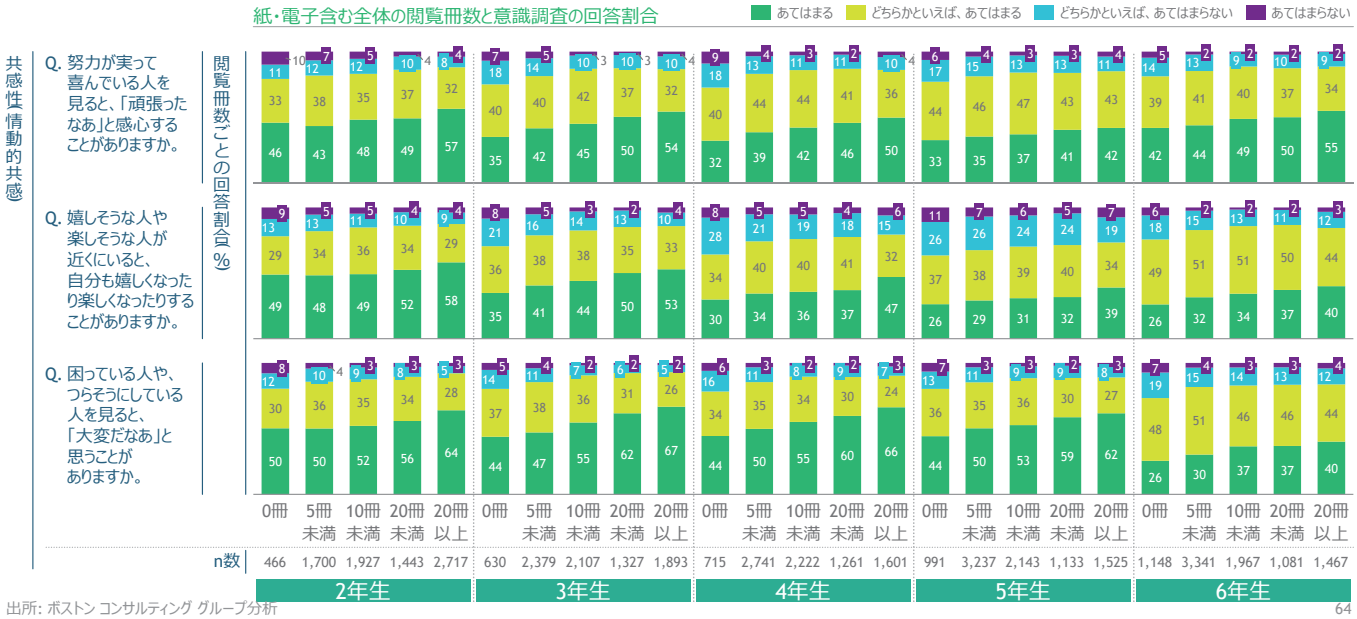
紙・電子全体の読書量×社会情動的コンピテンシー (1/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、情動的共感性は緩やかに高い傾向にある

紙・電子全体の読書量×社会情動的コンピテンシー (2/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

テーマ ③ 読書量を高めるための動機

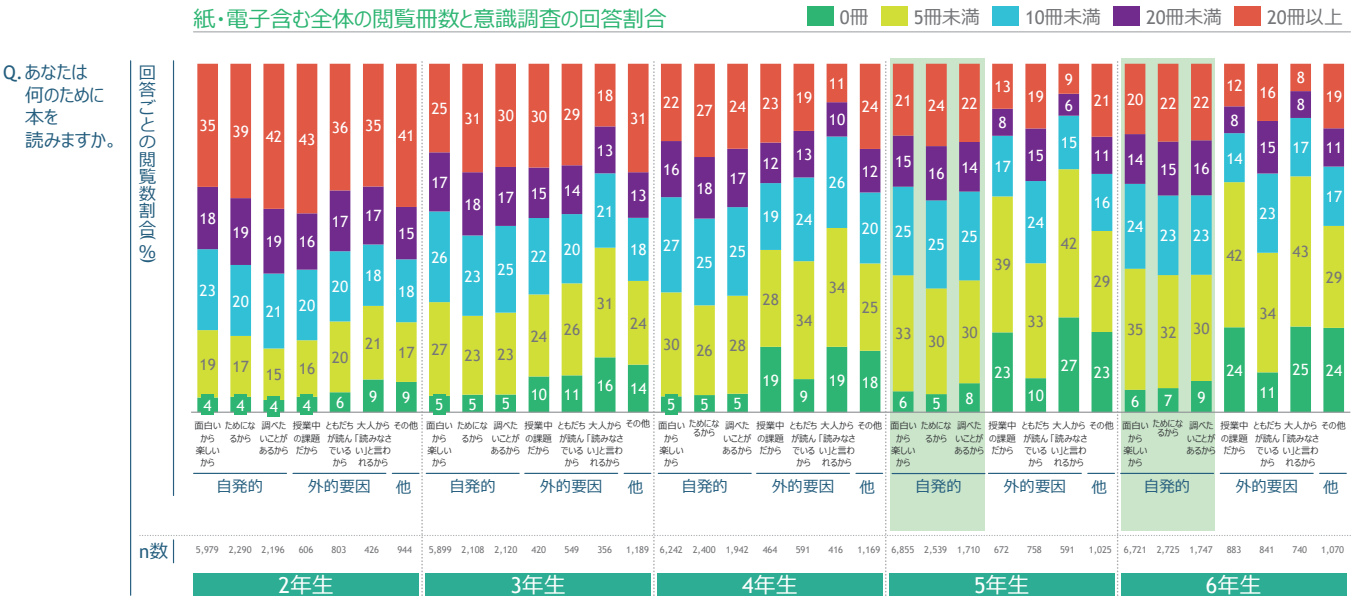
低学年では動機による差は見られないが、

高学年になると、自発的な動機がある生徒の方が閲覧冊数が多い傾向にある

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

読書の動機と閲覧冊数の関係をみると、低学年では差は見られないが、高学年になると自発的な動機がある生徒の方が閲覧冊数が多い傾向にある

紙・電子全体の読書量×読書の動機



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

分析結果サマリ

テーマ ① 読書と学力の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、国語の学力・学習状況調査の点数が高い傾向

テーマ ② 読書と社会情動的コンピテンシー(共感性)の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、共感性が高い傾向

テーマ ③ 読書量を高めるための動機

動機: 低学年では動機による差は見られないが、
高学年は自発的な動機があるほど、閲覧冊数も多い傾向

読書量を増やしていくことが重要。特に高学年には、自発的な読書に繋がるよう、興味関心にあった選書支援等を推進していく必要がある

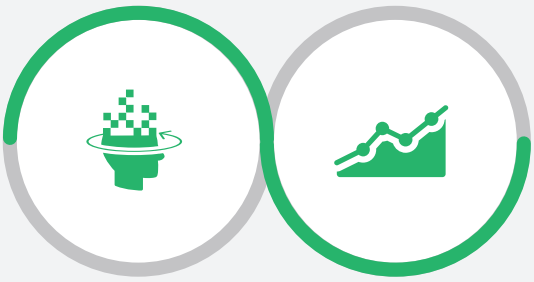
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

今後はさらなる高度化に向け、分析のインプットとアウトプットを変えていく

インプットデータの多様化

- 児童・生徒の本の読み方
- 教員による読書指導の仕方
- 向上させたい能力の定義・測定

⋮



アクションに繋がるアウトプット

- 学年ごとの指導改善
- 書籍・教材ラインナップの最適化
- 読書推進施策への示唆

⋮

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

学校向け発表会資料
(2026年02月5日実施)

BOSTON CONSULTING GROUP

国語科の資質・能力の育成や意識の醸成に寄与する学校での学習活動に関するデータ分析・検討事業

司書教諭・学校司書合同指名研修

2026年2月5日

OPEN YOKOHAMA

対象データ: 学力・学習状況調査、アンケート、電子書籍データ

	対象小学校数	対象児童数	学年の分布
横浜市学力・学習状況調査結果データ (2025年4月)	340 校	135,373 名	2年生 19.0%, 3年生 19.5%, 4年生 20.4%, 5年生 20.6%, 6年生 20.5%
読書に関するアンケート調査 (2025年7月)	293 校	44,490 名	1年生 0.4%, 2年生 19.2%, 3年生 19.3%, 4年生 19.7%, 5年生 20.8%, 6年生 20.6%
電子書籍サービスデータ (2025年9-11月)	(9月の例) 327 校	103,544 名	1年生 9.8%, 2年生 15.6%, 3年生 17.3%, 4年生 18.1%, 5年生 19.9%, 6年生 19.3%

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

分析結果サマリ

テーマ❶ 読書と学力の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、横浜市学力・学習状況調査の国語科の正答数が高い傾向

テーマ❷ 読書と社会情動的コンピテンシー (共感性) の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、共感性が高い傾向

テーマ❸ 読書量を高めるための動機・時間・環境

動機: 低学年では動機による差は見られないが、高学年は自発的な動機があるほど、閲覧冊数も多い傾向

時間: 放課後の電子書籍利用率は10%未満。端末の持ち帰り許可等で読書量を伸ばせる余地あり

環境: 電子書籍では文学・絵本といったジャンルの閲覧数が多く、偏りあり。閲覧が少ないジャンルは、学校図書館/紙の書籍で補えうる

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

テーマ❶ 読書と学力の関係サマリ

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、横浜市学力・学習状況調査の国語科の正答数が高い傾向にある

(但し、全体の相関係数としては低い)

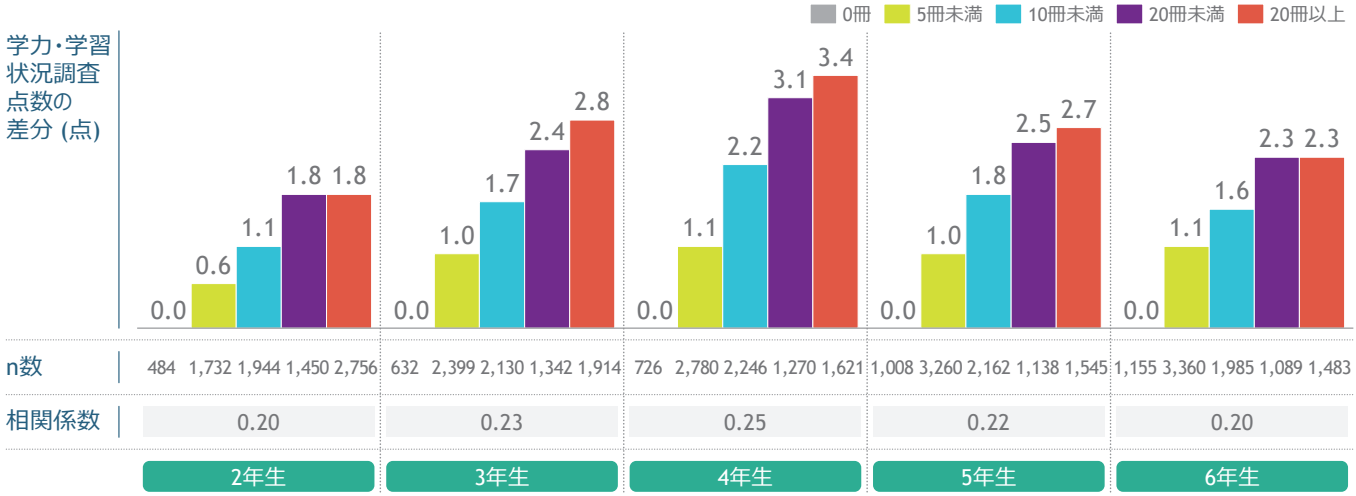
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、横浜市学力・学習状況調査の国語科の正答数が高い傾向にある。但し、全体の相関係数としては低い

紙・電子全体の読書量×学力

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数と学年ごとの横浜市学力・学習状況調査の国語科の正答数の平均値

(電子書籍の閲覧冊数が0冊の児童の点数を基準としたときの、点数の差分を示す)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

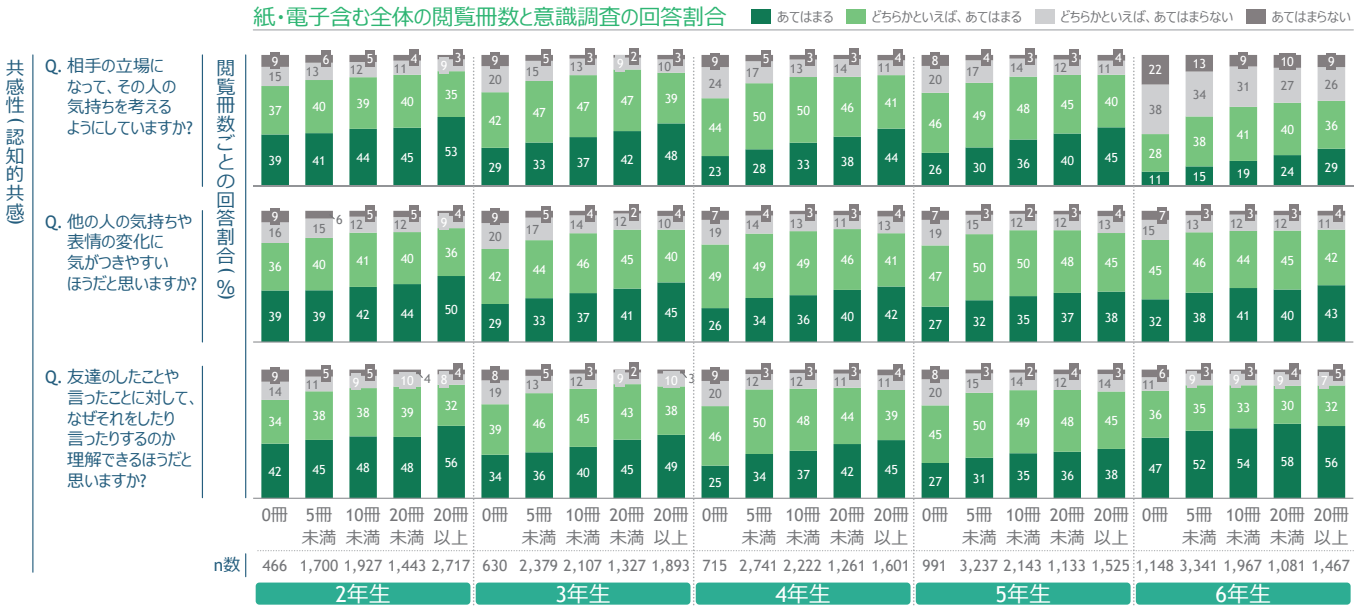
テーマ❷ 読書と社会情動的コンピテンシー (共感性) の関係

紙・電子書籍含む全体の閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、共感性が高い傾向にある

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、認知的共感性は緩やかに高い傾向にある

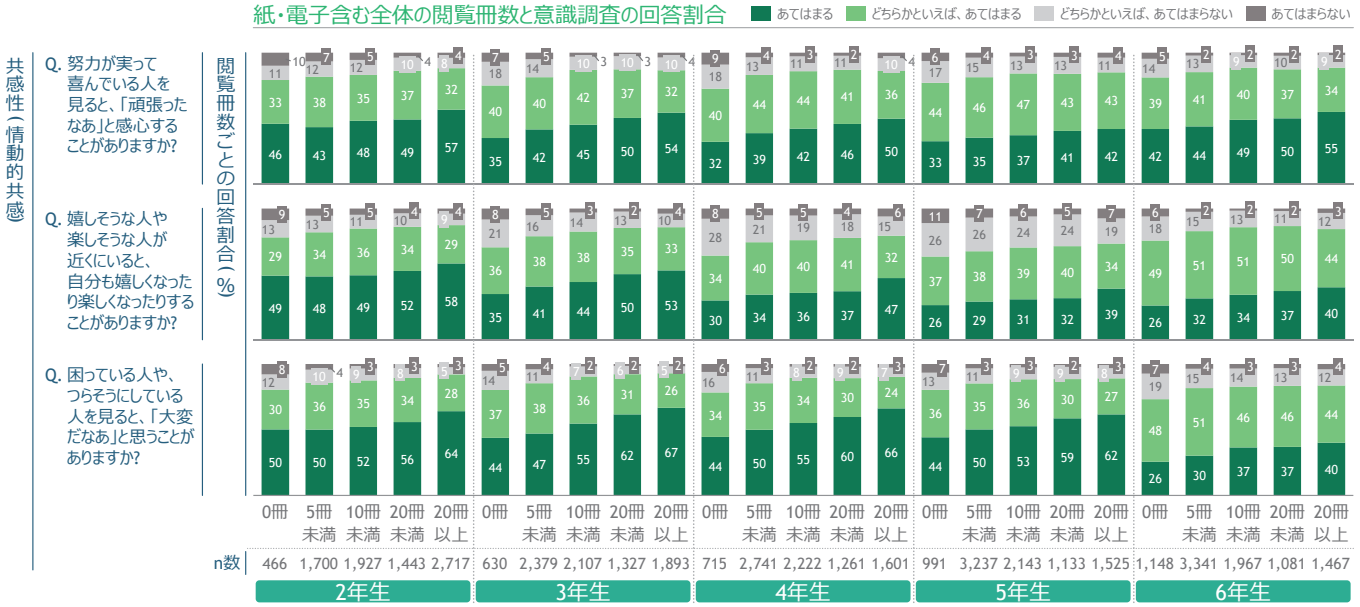
紙・電子全体の読書量×社会情動的コンピテンシー (1/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

閲覧冊数が多いほど、学年に関係なく、情動的共感性は緩やかに高い傾向にある

紙・電子全体の読書量×社会情動的コンピテンシー (2/2)



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

テーマ③ 読書量を高めるための動機・時間・環境

動機: 低学年では動機による差は見られないが、
高学年は自発的な動機があるほど、閲覧冊数も多い傾向

時間: 放課後の電子書籍利用率は10%未満。端末の持ち帰り許可等で
読書量を伸ばせる余地あり

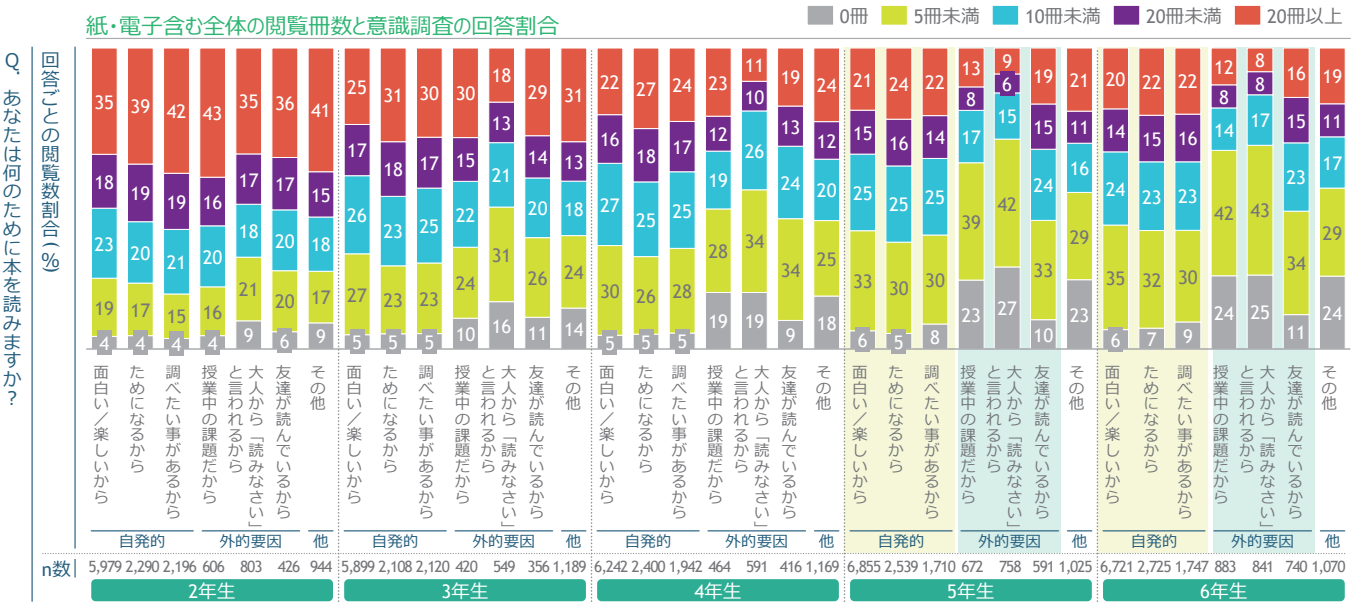
環境: 電子書籍では文学・絵本といったジャンルの閲覧数が多く、偏りあり。
閲覧が少ないジャンルは、学校図書館/紙の書籍で補えうる

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

読書の動機と閲覧冊数の関係をみると、低学年では差は見られないが、高学年になると自発的な動機がある児童の方が閲覧冊数が多い傾向にある

紙・電子全体の読書量 x 読書の動機

紙・電子含む全体の閲覧冊数と意識調査の回答割合



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

朝 (8時台) は50%程度が月1冊以上読んでいる一方、放課後の時間帯は10%未満。放課後については端末の持ち帰り許可等で読書量を伸ばせる余地が存在

電子書籍の読書傾向

時間帯別の1冊以上閲覧した児童の割合 (%)

		7時	8時 (朝読書)	9時	10時 (中休み)	11時	12時 (昼休み)	13時	14時	15時	16時 (放課後)	17時	18時	19時	20時
全体		4	50	46	44	46	32	35	32	9	6	7	7	7	7
月別	9月	4	51	48	48	49	36	40	35	10	6	6	7	7	7
	10月	4	50	47	46	46	32	36	32	10	6	7	8	8	8
	11月	3	48	42	39	43	28	31	30	8	6	6	7	7	6
学年別	1年生	1	32	35	34	37	24	22	17	2	2	3	3	3	3
	2年生	3	49	49	48	51	36	36	30	6	6	7	8	8	7
	3年生	4	54	54	52	53	38	42	38	10	7	8	9	9	8
	4年生	4	56	50	48	49	35	40	40	13	7	8	9	9	8
	5年生	5	53	46	43	45	31	37	36	12	7	7	8	8	8
	6年生	4	51	41	39	40	28	33	31	10	6	6	7	7	7

※ 全体、学年別に関しては、9-11月それぞれで割合を算出した後にその平均を表示
※ 6時まで、21時以降は閲覧冊数の割合が小さいため表から省略
出所: ボストン コンサルティング グループ分析

電子書籍では文学・絵本といったジャンルの閲覧数が多く、偏りがある。閲覧が少ないジャンルは、学校図書館/紙の書籍で補える可能性あり

電子書籍の読書傾向

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

分析結果サマリ

テーマ❶ 読書と学力の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、横浜市学力・学習状況調査の国語科の正答数が高い傾向

テーマ❷ 読書と社会情動的コンピテンシー (共感性) の関係

量: 閲覧冊数が多いほど、共感性が高い傾向

テーマ❸ 読書量を高めるための動機・時間・環境

動機: 低学年では動機による差は見られないが、高学年は自発的な動機があるほど、閲覧冊数も多い傾向

時間: 放課後の電子書籍利用率は10%未満。端末の持ち帰り許可等で読書量を伸ばせる余地あり

環境: 電子書籍では文学・絵本といったジャンルの閲覧数が多く、偏りあり。閲覧が少ないジャンルは、学校図書館/紙の書籍で補えうる

読書量を増やすことが重要

端末の持ち帰りに加えて、特に高学年には、自発的な読書に繋がるよう、**興味関心にあった選書支援等を推進していく必要**がある

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

分析前提と留意点: 現時点では因果の分析はできず、分析アプローチと相関の提示としてご理解いただきたい

今年度は、横浜市学力・学習状況調査後に、
読書に関するアンケート調査や電子書籍利用データを取得。
そのため、結果の因果関係まで踏み込めず、あくまで相関として捉える

2025年4月	2025年7月	2025年9月-
横浜市学力・学習状況調査	読書に関するアンケート調査	電子書籍利用データ

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

共創の仕組みを生かし、読書で探る 教育のカタチ

インプットデータの多様化

- 児童・児童の本の読み方
- 教員による読書指導の仕方
- 向上させたい能力の定義・測定
- ⋮

アクションに繋がるアウトプット

- 学年ごとの指導改善
- 書籍・教材ラインナップの最適化
- 読書推進施策への示唆
- ⋮

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

Agenda

(1) プロジェクト運営方針の作成、プロジェクトの管理

(2) 研究仮説、データ分析方針について検討及び分析結果の取りまとめ

ア 研究仮説についての検討

イ データ分析方針の検討

ウ データのクレンジング

エ データの分析

オ 分析結果の整理、取りまとめ

カ 成果報告

(3) 令和8年度以降のプロジェクト研究方針についての提案

令和8年度以降の分析範囲の検討

来年度以降の広がりについて

STEP1 読書 × 学力 社会情動的コンピテンシー

今年度と同様に、読書と学力・学習状況調査結果や社会情動的コンピテンシーに関する因果関係の再検証や、追加分析を実施

STEP2 読書 × 課題を踏まえた能力

横浜市の2040年までを見据えた課題を踏まえ、特に注力すべき国語科の資質・能力を検討し、その資質・能力と読書の関係を分析

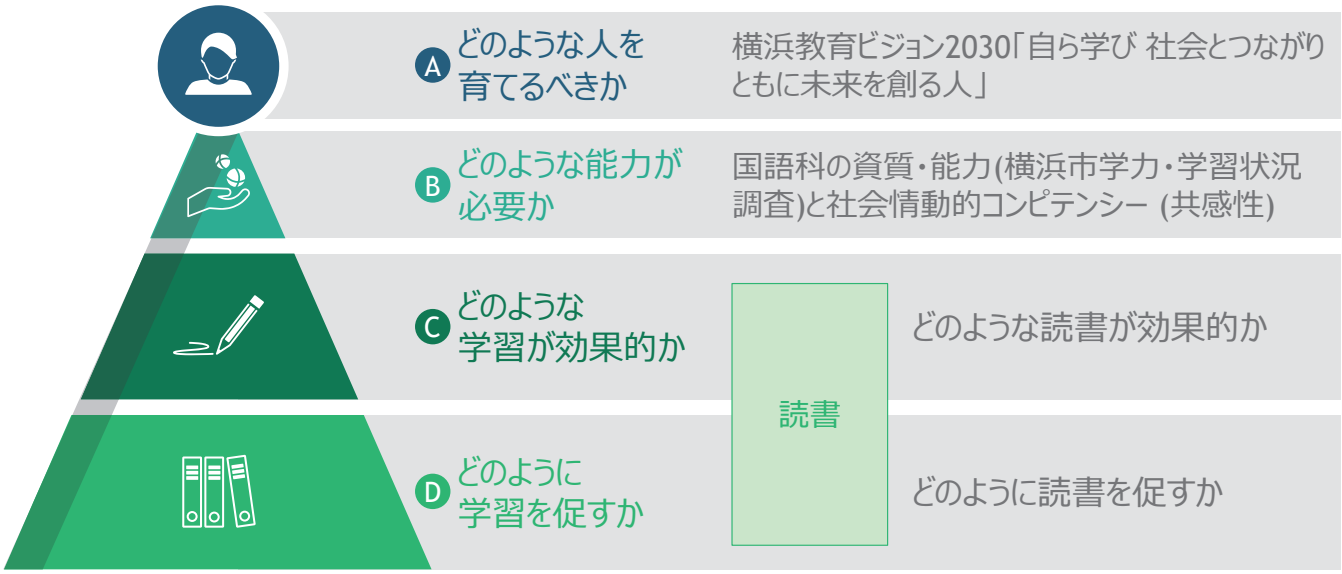
STEP3 読書以外 × 課題を踏まえた能力

資質・能力の形成には読書以外の要素も関与するため、読書に限定せず、学校教育全般の環境の分析へと広がりを検討

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

STEP1

今年度と同様に、読書と国語科の学力・学習状況調査結果や社会情動的コンピテンシー(共感性) に関する因果関係の再検証や、追加分析を実施



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

STEP1

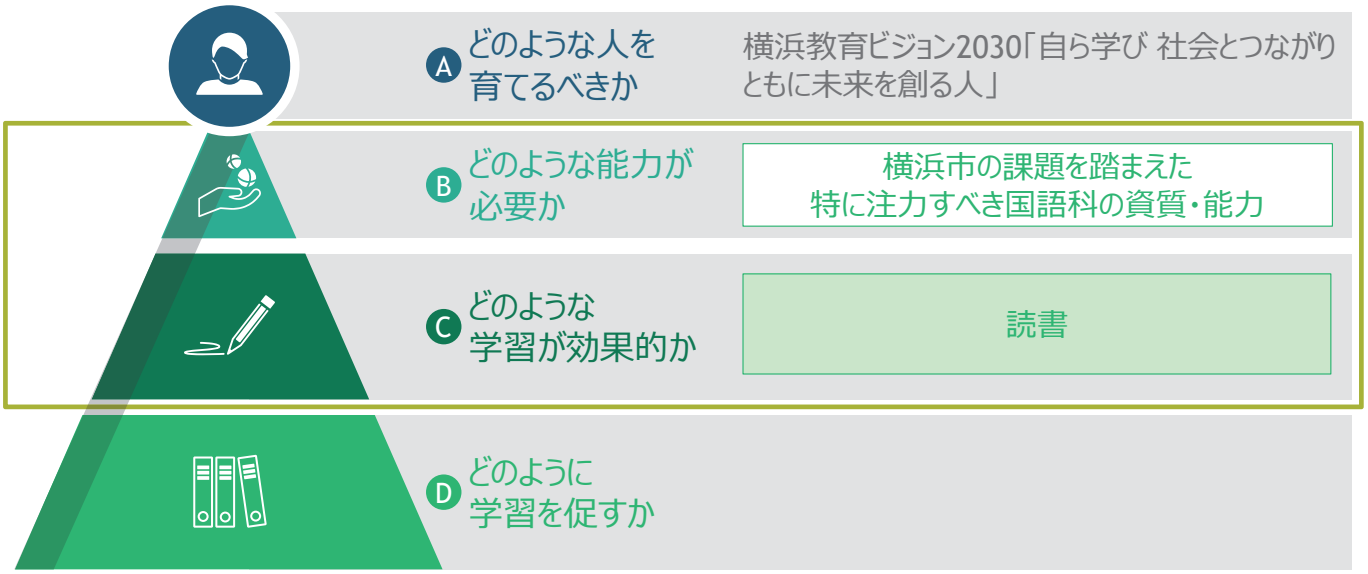
令和8年度に検証できる追加仮説の例

	C どのような読書が効果的か		D どのように読書を促すか	
	頻度	難易度	読書媒体	本と出会う機会
仮説	毎日継続的に読書をしている児童生徒は、国語科の資質・能力の定着が安定している	適切な難易度(易しい本/難しい本) の本を選んでいる児童生徒ほど、国語科の資質・能力の定着が高まる	電子書籍を利用する児童生徒の方が、紙を含む読書量の総量が伸びる	学校司書が児童生徒に直接おすすめの本を紹介することで読書量が増える
とれうるアクション	「毎日15分読書」等の継続習慣を学校・家庭で推進する	学年や習熟度に応じた「適正難易度本リスト」の提示や指導に反映する	利用方法を説明する、授業で活用する等、電子書籍の利用をする	学校司書と児童生徒の対話が行われる機会を増やす

出所: ボストン コンサルティング グループ分析

STEP2

社会や教育環境の変化を踏まえ、特に注力すべき国語科の資質・能力を検討し、その資質・能力と読書の関係を分析できうる



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

STEP2

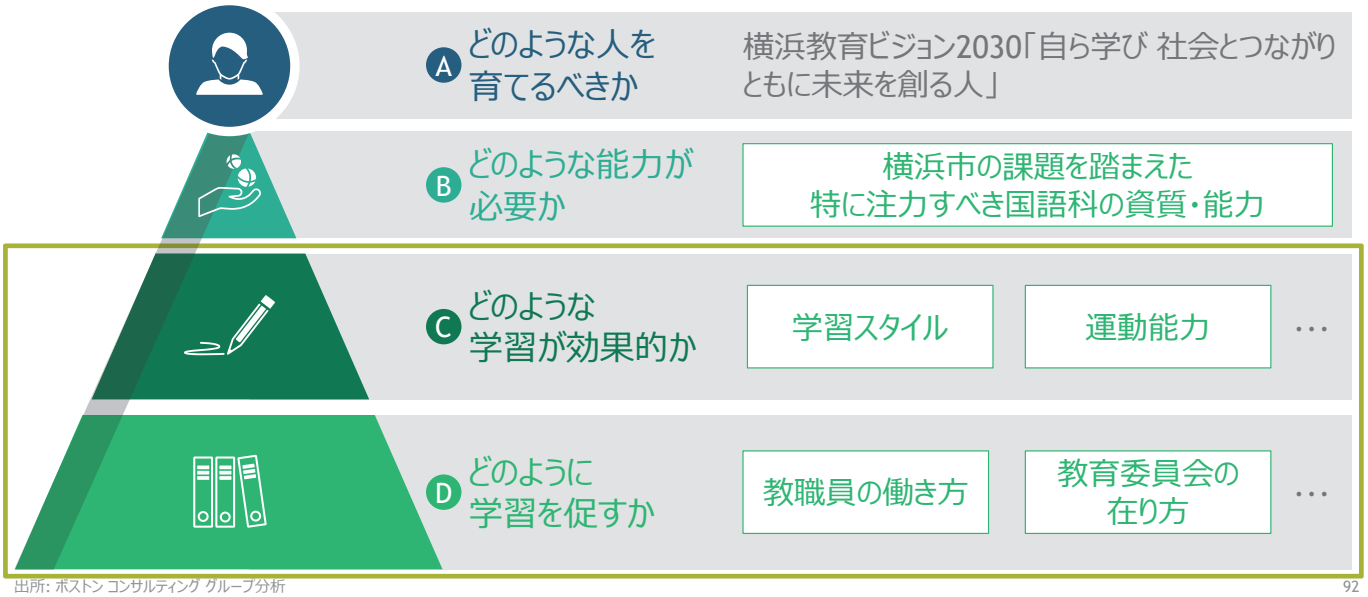
横浜市の教育を取り巻く課題を踏まえ、文科省が示す「言語能力を構成する資質・能力」中から、これからの時代に求められる資質・能力を検討

2040年までを見据えた横浜市の教育分野での考えられうる課題	課題を解決するために注力できる「国語科において育成を目指す資質・能力」
子供の減少、地域のつながりの希薄化	- (言語能力の育成で解決する問題ではない)
地球温暖化、大規模災害の到来	- (言語能力の育成で解決する問題ではない)
外国人労働者の増加、多文化共生	〈思考・判断・表現〉言葉を通じて伝え合う力(相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解) 〈学びに向かう力〉言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感する等互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度
情報社会の進展、AIの進化	〈思考力・判断力・表現力等〉考えを形成して深める力(新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力) 〈思考・判断・表現〉情報を多面的・多角的に精査し構造化する力(妥当性・信頼性の吟味)
学校の役割の拡大、個に応じた学びへの転換	- (言語能力の育成で解決する問題ではない)

出所: 2040年頃までの課題を見据えた横浜市の教育分野での取組 第32次地方制度調査会第3回専門小委員会資料、ボストン コンサルティング グループ分析

STEP3

資質・能力の形成には読書以外の要素も関与するため、読書に限定せず、学校教育全般の環境の分析へと広ることが考えられる



出所: ボストン コンサルティング グループ分析

Disclaimer

The services and materials provided by Boston Consulting Group (BCG) are subject to BCG's Standard Terms (a copy of which is available upon request) or such other agreement as may have been previously executed by BCG. BCG does not provide legal, accounting, or tax advice. The Client is responsible for obtaining independent advice concerning these matters. This advice may affect the guidance given by BCG. Further, BCG has made no undertaking to update these materials after the date hereof, notwithstanding that such information may become outdated or inaccurate.

The materials contained in this presentation are designed for the sole use by the board of directors or senior management of the Client and solely for the limited purposes described in the presentation. The materials shall not be copied or given to any person or entity other than the Client ("Third Party") without the prior written consent of BCG. These materials serve only as the focus for discussion; they are incomplete without the accompanying oral commentary and may not be relied on as a stand-alone document. Further, Third Parties may not, and it is unreasonable for any Third Party to, rely on these materials for any purpose whatsoever. To the fullest extent permitted by law (and except to the extent otherwise agreed in a signed writing by BCG), BCG shall have no liability whatsoever to any Third Party, and any Third Party hereby waives any rights and claims it may have at any time against BCG with regard to the services, this presentation, or other materials, including the accuracy or completeness thereof. Receipt and review of this document shall be deemed agreement with and consideration for the foregoing.

BCG does not provide fairness opinions or valuations of market transactions, and these materials should not be relied on or construed as such. Further, the financial evaluations, projected market and financial information, and conclusions contained in these materials are based upon standard valuation methodologies, are not definitive forecasts, and are not guaranteed by BCG. BCG has used public and/or confidential data and assumptions provided to BCG by the Client. BCG has not independently verified the data and assumptions used in these analyses. Changes in the underlying data or operating assumptions will clearly impact the analyses and conclusions.